
メイドくんは男の娘！

arty

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドくんは男の娘！

【Zコード】

Z0882T

【作者名】

arty

【あらすじ】

貴族の青年コリンは、とある事情から使用人としてカントリーハウスで働くことになってしまった。ハウスメイドやスカラリーメイド、キッチンメイド、ランドリーメイド、パーラーメイドと、多様なメイド達に囲まれながら、階下の生活に慣れ親しんでいく。ヴィクトリア朝の近代英國をベースに、中世ファンタジーと現代萌え文化の要素を盛り込みました。元はFLASHノベルゲームです。コミケやWebサイト、他投降サイトなどでも公開しています。

王立陸軍士官学校は、帝国軍における士官育成機関だ。

士官学校に入学出来るのは、貴族だけと相場が決まっている。

特に帝都郊外に敷地を有する中央校は、上級貴族の子息達ばかりが在学する最エリート校という位置付けだった。

何しろ生徒父兄の大半が、爵位持ちの領主階級という偏りっぷりだ。

仮に授業参観でも開催したら、銘々たる顔触れになることだろう。もちろん地方領主に仕える身分である下級貴族の子息や、平民出身の生徒がいない訳でもない。

成績優秀と認められた彼らは、特別に奨学生として在籍することが許されていた。

しかしその人数は少なく、例外中の例外と言えた。

「急に呼び出しだなんて、いつたい何だらうな」

栗色の髪と、子供っぽさを残した頼りなさそうな顔つきをした青年が、磨き上げられた板張りの廊下を歩いていた。

コリン・イングラム、士官学校三年生。

奨学制度ではなく、家柄による審査で入学したクチだ。

実父はスリス公爵家の次期当主。

長男であるコリンは、その後継者と目されていた。

エリート揃いの中央校においてさえ、その血統の良さは頭ひとつ飛び抜けていた。

ひとまとめに領主と言つても、もちろん横並びではない。

社交界では男爵から公爵まで、さらに細かく序列付けされている。

四大公爵家のひとつであるイングラム家は、王家に次ぐ格付けを

誇る名門貴族だった。

「コリンを職員棟まで呼び出したのは、フレデリカ・ショーターという新任の女性教官だ。

ちょっととした有名人で、名前だけはコリンも耳にしたことがある。イングラム家と同じ四大公爵家のひとつであるショーター家の令嬢にして、帝国でも五指に入るほどの天才法術職人。

前線から退いて、教官になっていたとは知らなかつた。

コリンに声を掛けてきたのは、公爵家の間同士、顔ぐらい合わせておこうといったところか。

フレデリカの研究室であることを示す真新しいネームプレートに、コリンは足を止める。

ひと通り身だしなみを整えると、扉を軽くノックした。

「コリン・イングラムです」

「待つていたよ。入りたまえ」

「失礼します」

ドアノブに手を掛け、扉を開く。

着任したばかりで、荷解きすら終わっていないのだろう。

部屋には積み重ねられたままの本が幾つも山を作つており、用途の知れない器具類が乱雑に置かれている。

室内に一步踏み出した時、コリンの視界を何かが過ぎつた。

それは、全力でフルスイングされた木刀の影だつた。

「せいや———ツ」

「うおおおおおおおおッ？」

海老戻りみたいな体勢で、半ば強引にその攻撃を避けるコリン。研ぎ澄まされた反射神経は、幼年期より十年近く続けてきた剣術訓練の賜物だ。

「ふむ。反射神経は及第点と」

いかにも小生意氣そうな女の子がそこには居た。

「コリンを襲つた木刀を投げ捨てて、何やらメモを取つている。小っちゃい。

身長はせいぜい、頭の位置がコリンの胸元に届く程度だ。

悪戯にしては度が過ぎる行いに、頭から怒鳴りつけでもおかしくないシチュエーション。

しかし、コリンは紳士だった。

そんな大人げない真似はしない。

冷静に思考を回転させる。

研究室に居るからには、フレデリカ教官の身内だらう。

家族と考えるのが自然そうだ。

危ない、危ない。

もう少しでフレデリカ教官のお子様を、叱りつけてしまつといつだつた。

内心で、ほつと胸を撫で下ろす。

「コリンは努めて紳士的な態度で、無礼な木刀少女に話し掛けた。

「ここにちは、お嬢さん。ちょっと聞きたいんだけど、お母さんは不在かな？ 僕、君のお母さんに呼ばれて来たんだけど」

「失敬な！ ボクだよ！ ボクがフレデリカだよ！」

女の子が、顔を真っ赤にさせて怒りを爆発させた。

「は？」

コリンが間抜けな顔をして首を傾げた。

有り得ない。

目前の少女は、どう McConnell に見ても年上とは思えなかつた。
発育途上の小柄な身体に、驚くほど童顔。

コリンの想像していた美人教官とは、イメージが全く一致しない。

「だ・か・ら、ボクがフレデリカだと言つてる！ 確かに多少背が
低いことは認めるけどね。それにしたつて、ボクから溢れるこの知
的なオーラで察したまえよ！ ほら、君の父上から送られた紹介状
だ。君のことをくれぐれも宜しくと頼まれて來たけどね、すっかり
やる気がなくなつてしまつたよ」

渡された手紙を確認すると、確かにコリンの父が書いた筆跡だつ
た。

署名までばっちり入つてゐる。

どうやら本当にこの女の子がフレデリカ教官らしい。

今度は逆に、経歴詐称を疑いたくなつた。

とにかくフレデリカが、ショーター家の「ご令嬢である」とには間
違ひない。

頭を撫でたくなるような女の子に見えて、大人のレディとして
扱うことを求められていそだ。

初対面からいきなり怒らせてしまったのは失敗だったが、これから挽回すればいい。

「コリンは胸に手を当てる、恭しく一礼をしてみせた。

「大変失礼しました、フレデリカ教官。お会いできて、とても光榮です」

「ふむ。教官と呼ばれるのには正直慣れないね。年もそこまでは離れていないし、ボクのことは気安く先輩とでも呼びたまえ。これから君はボクの生徒であると共に、職場の部下であり、後輩でもあるからね。ま、よろしく頼むよ」

「え？ 何の話ですか？」

「聞いてないのかい？ しつかりしたまえよ。情報伝達の速さは、戦場じや命に関わるよ」

フレデリカが何を言つているのか理解できない。

顔合わせの挨拶ぐらいにしか思つていなかつたコリンだが、本人の知らないうちに、話は予想外の方向でまとまつていてる様子だつた。

「コリン・イングラム。軍務省作戦局の試用員を命ずる。所属は特務本部四課だ。おめでとう。就職活動をスルーして、いきなり任官決定だよ。普通は建前だけでも、試験や面接といった過程を踏むものだけだね。ま、親の七光りに感謝するといい

「はあ」

コリンが曖昧に頷く。

父からは何も聞かされていなかつた。

恐らく忘れた頃にでも、事後連絡の書簡が届くのだらう。
父上らしい、いつもの進め方だつた。

「そう不安な顔をしなくても大丈夫だよ。学生の君に、いきなり実戦任務は無理だ。ボクにしたつて、こちらの士官学校に出向してきたばかりだからね。しばらくは教官として授業を持ちながら、法術研究に取り組むつもりだ。君にはそのアシスタントをお願いしようかな」

「分かりました。その程度でしたら、何でも手伝いますよ」

フレデリカの発言に、少しだけ安心する。

どうやら士官学校を中退して、いきなり作戦局に行けといつ話ではないらしい。

教官の研究室に所属して、その手伝いをしながらノウハウを学ぶことは学内でも推奨されていた。

師弟制度の簡易版みたいなものだ。

ついでに特定の教官に師事することで、卒業後の就職口を紹介してもらえるという役得もある。

冷静に考えてみれば、今回の件も決して悪い話ではなかつた。

「それじゃ早速だけど、全裸待機しておきたまえ。ボクはこれから準備がある」

「すいません。意味が分かりません」

フレデリカからの唐突すぎるオーダーに、思わずコリンは素で返事をしてしまつた。

「おや、帝国語が通じなかつたかい？ 身につけている衣服を全て

脱いだ上で、しばらく待つていろといつ意味なんだけど」

「単語の意味ではなく、意図が理解出来ないです」

実年齢はともかく見た目が女の子なフレデリカと、全裸になつて密室で一人きり。

誰かに見られでもしたら、間違いなくコリンの方が露出狂として逮捕されてしまう状況だ。

公爵家の跡取り息子、全裸で学内大暴走！ 校内新聞にそんな記事でも載れば、さすがのコリンも社会的に抹殺されてしまつ。

「ああ、ボクのことなら心配しないでくれたまえ。君のことは、研究用マウスと同程度にしか見ていないからね。今さら男性の裸を見たところで、悲鳴を上げたりはしないよ」

「先輩が大丈夫でも、俺の方が抵抗ありますよ！ これ何の罰ゲーム？」

「ふむ。美人すぎるこのボクを、異性として意識してしまつのは仕方ないことだね。しかしそれでは仕事にならない。そうだね。ボクのことは、美人教官型の自動測定装置とも思つておきたまえ。君だって体重計を相手に、羞恥心など感じないだろ？」

「そんな体重計があつてたまるか――――ッ！」

思わず突つ込みを入れるコリン。

初突つ込みだつた。

まさか将来、フレデリカ専属の突つ込み要員になるとは、この頃のコリンは予想もしていなかつた。

「「」ちゅや「」ちゅや「」つるさいね。男の子だろ？ 往生際が悪いよ。天才法術職人であるこのボクが、君が宝の持ち腐れにしている素質を開花させてあげると言つてはいるのだよ。ほら、全てをボクに委ねるといい。悪いようにはしないさ」

うわあ、自分で自分を天才とか言つちやつたよ、この人！ 可愛い顔立ちしているのに勿体ない。

残念系美少女だった。

それにアシスタンントをお願いしたいなどと言つていたが、それは明らかに言葉の綾。

人体実験臭がぷんぷんする。

もはやコリンには、嫌な予感しかしなかつた。
にじり寄るフレデリカ。

後退るコリン。

どん、と背中にドアが当たつた。
退路はない。

「ひいつ」

「それともあれかい？ 君はボクみたいな美人のお姉さんに、無理矢理脱がされるとハアハアするタイプなのかな？ やれやれ、仕方ないね。今回だけはその変態趣味に付き合つてあげるとしよう。こんなサービス、滅多にしないんだからね！」

「何その取つて付けたようなツンデレ属性！ あと先輩には、先輩が思つているほどお姉さん属性ありませんから！ あああああッ、パンツは！ パンツだけは許して————ッ！」

外見年齢ティーンエイジャーの女の子に、全裸に剥かれるという経験は長くコリンのトラウマとなる。

とにかくフレデリカ先輩は、初めて会った時から自由奔放な人だつた。

それまで順風満帆にエリートコースを歩んできたコリンの人生は、この出会いから大きく道を踏み外したと言つても過言ではないだろう。

爵位を継ぐ嫡流に当たるコリンと、そつではない非嫡子のフレデリカ。

同じ公爵家でも、立場は微妙に異なる。

しかし、その辺りの事情を差し引いたとしても、先輩のフリーダムさは行きすぎだ。

公爵家人間に、こんな自由人がいるとは驚きだつた。

コリンの身柄を、フレデリカに預けた父上の思惑は明白だ。

情報収集や作戦立案を担当する軍務省は、帝国軍上層部のデスクワーク部門に当たる。

作戦実行部隊である各騎士団への任官に比べると、戦死の可能性は著しく低い。

大切な跡取り息子を、戦場で失いたくないという親心。何事にも慎重な父上らしい判断と言えた。

今ならコリンは、その父上の判断は大間違いだつたと断言出来る。父上はフレデリカ先輩のことを何も分かっていない。

先輩と行動を共にするぐらいなら、戦場の方がよっぽど安全だ。

そもそも先輩が、士官学校での法術研究だけで満足する訳がなかつた。

コリンの配属となつた作戦局特務本部は、文官組織の軍務省では唯一例外的な実戦部隊。

正規軍では対処の難しい、非正規戦を専門としていた。

結局のところ、コリンの士官学校卒業を待つて、フレデリカ先輩は原隊復帰することになる。

正式に四課班員となつたコリンは、先輩に連れ回されて何度も死にそうな目に遭つてきた。

ひどい話しだ。

トラブル続きの職場にコリンがすっかり馴染んでしまつた頃には、フレデリカ先輩との出会いから既に三年が経過していた。

白い崖と碧い海。

初夏の日差しが照りつける中、飛び交うカモメ達の鳴き声を搔き分けながら、大型の帆船がゆっくり港へ入ってくる。

桟橋では日に焼けた荷役人夫達が、接岸準備で慌ただしく走り回っていた。

大型商船のすぐ脇を擦れ違いで出港していくのは、海軍の戦列艦だ。

決して狭くない港湾は、大小多様な船舶で溢れ返っていた。擦れ合つようにして交差する大型艦の足下を、小さな漁船が巧みな操船ですり抜けていく。

港湾都市フローマス。

それがこの港の名であり、コリン達の新しい任地だった。

帝国本島の南端に位置し、旧王国連合領とは海峡を挟んで向き合っている。

気象に恵まれていれば、王国側の港まで半日程度の航海で辿り着けることだろう。

別名、帝国本島の表玄関。

世界中から集められた富のおよそ半分が、この港を中継して帝都をはじめとする各都市へと運ばれる。

フローマス湾には一つの河川が注ぎ込んでおり、丁度Y字を描くようにして水域が市街地を三つのブロックに区切っていた。

そのうち東地区は、いわゆる貧民街と呼ばれるエリア。隣接する南街区から橋を一本渡つただけで、同じ都市とは思えないほど街の雰囲気がガラリと変わる。

今にも崩れそうな木造平屋がぎつしつとひしめき合ひ、整備されていない道が複雑に入り組んでいた。

治安レベルは最悪。

不慣れな旅人が東街区に迷い込んでしまって、身ぐるみ剥がされたという逸話には事欠かない。

「見たまえ、この混沌っぷりを！ 素晴らしいと思わないかい？ まさにフローマスの魅力は、この街区にこそ濃縮されているという訳だね。さつき地元騎士団の兵士から貰つた手配書の参考人も、きっとこの辺りに潜伏しているはずだよ」

確かにこの東街区は、社会底辺者達にとつての楽園でもあつた。濫立する安宿やパブは、どこも荒っぽい船乗りや港湾労働者達で大賑わいだ。

酒や賭博に女とクスリ。

合法、違法を問わず、あらゆる娯楽がこの街では提供されている。特に東街区のブラックマーケットは有名で、金とツテさえあれば買えないものはないとの評判だ。

「はあ、そうですか」

馬上で大喜びのフレデリカ先輩に対し、コリンの反応は冷めたものだった。

青地に金の縁取りがされたコートに、羽付きのつば広帽子。コリン達が身につけているのは、軍務省作戦局の制服だ。

貴族趣味全開な装備品は、薄汚れた東街区の雰囲気において周りから浮きまくつている。

これでは身ぐるみ剥いでもほしいと言つてているようなものだ。

「ここは帝国内でも三箇所しか認められていない、聖絶指定種の保

護特区でもあるからね。異端者狩りを専門とするボクらには、ぴったりの任地だ」

「……それで、先輩。この道は東街区のどこの辺なんですか？」

「むぐっ」

無秩序な街並みを見渡したコリンの間に、先輩が言葉を詰まらせる。

「コリン、君はいつからそんなに冷たい口をきく人間になってしまったんだい？ 出会った頃は、先輩、先輩って、尻尾を振つてボクに懐いてくれていたのに。ああ、あの頃の君は可愛かつたなあ」

「そんな思い出はありません。で、やっぱり道に迷つたんですね？」

「失敬な！ まさか君は、このボクがそんな初步的なミスをするとでも思うのかい？ そんな訳がないだろ？！ 見たまえ、地図だつてちゃんと持つてきている！」

語氣を強めながら懐から地図を取り出す先輩を、コリンは無言のまま半眼で見つめ続ける。

その視線から逃れるように顔をそらすと、先輩は聞き取れるかどうかといった小声でぼそぼそと呟いた。

「ふむ。実は持つてきた地図が使い物にならないと、つい先ほど気が付いてしまった訳だけだね。この辺りの地区では、建物の増改築に地図の更新が追いついていないようだ」

例え地図が不正確だつたとしても、最初からしつかり見ていれば

現在地を見失うことはなかつたはずだ。

あまりの自信満々な様子に、先輩を信じて地図を預けてしまったのが失敗だった。

ただでさえ狭い街路は、露店や「ミの山などに不法占拠されおり、場所によつては完全に道を塞いでいる。

おかげで街全体が迷路のようだ。

馬首を巡らせながら、どちらに進めば元来た大通りに戻ることが出来るのか記憶を探り返す。

「何だい、その諦めきつた顔は！ 不安になる要素など何処にもないよ！ 砂漠の真ん中で遭難している訳じやないんだ。道ならその辺りの住民に聞けば済む話しだ。いや、決して道に迷つた訳ではないけどね」

「確かにそれしかなせりですけど……でもこの辺りつて移民街みたいですよ？ まさか帝国語が通じないなんてオチはないでしょうね」

「場違いな一人は、住人達からの注目を一身に集めていた。遠巻きにこちらを観察する人々のヒソヒソ声は、王国語のようこ聞こえる。

「コリンの不安に、先輩はきょとんとした顔をしてみせた。

「？ 君はもしかして、王国語だと何か問題でもあるのかい？」

「すいませんね、どうせ俺は王国語そんなに得意じやありませんよ

「氣まずそうに顔をとがらせたコリンに、先輩が勝ち誇つたような笑みを浮かべる。

形勢逆転。

道に迷つた原因が自分であることは、すっかり忘れてしまつたらしい。

「この上なく嬉しそうに先輩がコリンを責め立てる。

「呆れた！ これは心底驚いた！ パブリックスクールと士官学校の十年間、王国語は必修科目だったはずだろ？ 帝国の教育システムが問題なのかい？ それとも君がバカなだけなのかい？ 仕方ない。ここはこのボクが、流暢な王国語による「ミニミニケーションの見本を見せてあげよう。君は先輩の偉大さに感涙しながら、せいぜいボクの人心掌握術を学ぶといい」

「コリンが王国語を苦手としていることは知っていたはずなのに、ひどい言われようだ。

颯爽とコートを翻した先輩が、周囲を見渡し声を掛けたターゲットに目星を付ける。

先輩が選んだのは、住人達の中でもフードを被りこそそと路地裏に消えようとしていたひとりの若者だった。

『おい、 そこの君。 止まりたまえ！』

騎馬したままの上から目線。

人にものを頼む態度ではなかつた。

しかしフレデリカ先輩の場合、それが様になつていてるから困る。

貴族オーラというやつだろ？

凛とした先輩の声に、フードの若者の動きがビクリと止まつた。

『どうした？ それでは顔も見えないだろ？ こちらを向きたま

え』

フードを深くかぶり、背を向けたままの若者を先輩が叱責する。

いきなり上級貴族に声を掛けられて、緊張でもしていのだからつか。

様子がおかしい。

見るに見兼ねたコリンが、下馬してワードの若者に近づいてくる。

先輩に任せておくよりは、片言しか話せない自分の方がまだマシそうだという判断だつた。

剣の間合いに一步足を踏み入れたその瞬間、若者の振り向き様に放った閃光が爆音と共に炸裂した。

第1話・03 カントリーハウス1

なだらかに連なる丘陵を、若緑色の草原が続いていた。意図的に残された群生林が、単調になりがちな景観にアクセントを加えている。

季節の花が、所々で控えめに咲いていた。

市街地での騒動も、この敷地までは届かない。

港湾からの潮風も薄れ、新緑の香りがさわさわとそよぐ。程よく手入れの行き届いた緑地を、うねりながら一本の道が伸びていた。

その先に建っている邸宅が、ヘイウッド家のカントリーハウスだった。

白塗りの壁に、青い屋根。

張り出したバルコニーの下は、テラスになっていた。

木造造りの一階建て。

使用人スペースである屋根裏や半地下階まで含めると、実際には

四フロア構造となる。

中央棟を挟んで東棟と西棟が、「」の字の形に並んでいた。

屋敷の現主人の名は、シエリー・ヘイウッド。

フローマス領主である伯爵の末娘であり、ヘイウッド家の幼き当主代行だった。

ストレートの金髪と、少し吊り目な翠の瞳は、いかにも貴族のお嬢様といった顔立ち。

伯爵の親バカぶりは社交界でも有名で、我が娘の愛らしさを語らせるといしばらくは止まらない。

しかし、身内の巣廻田を抜きにしても、実際にショリーは容姿の整つた少女だつた。

「シャルロが居ないぞつ、ビーいう訳だ―――つ？」

ヘイウッド邸の玄関ホールに、ご主人様であるショリーの可愛らしい声が響き渡る。

一階から一階まで吹き抜けになつてゐるホールは、中央にドンと大階段が構えていた。

その大階段を、ショリーは一息に駆け下りる。

ドレスの裾がはしたなく翻るが、そんなことを気にしている余裕はなかつた。

さらさらと細い金髪が、ショリーの背を追つよつとして流れる。

「あら、お嬢様。シャルロちやんがどうかしましたか？」

代表して声を掛けたのは、彼女達を総括するメイド長だ。ホールの清掃をしていたハウスメイド達も、掃除の手を止めて御主人様へと視線を集める。

黒のワンピースに白いエプロンとカチューシャといつ、オーソドッククスなメイド服。

すらりと背の高いメイド長は、長めのロングヘアをサイドテールにまとめいてた。

「執務室や屋根裏部屋も探してきたが、シャルロの姿がどこにも見つからないのだつ！ はー、もしかしてあまりの可愛さに、誘拐されたのではないかつ？」

自らの想像に、ショリーが顔を真つ青にさせた。

子供らしい想像力豊かな表現に、ほんの少し苦笑を浮かべながら

メイド長が応じた。

「「」心配なく。今の時間、シャルロちゃんはメッシュセンジャーの仕事で街に出掛けているだけですよ。それよりお嬢様、本日の講義はもう良かつたのですか？」

「社交ダンスのレッスンが、中止になつたのだ。市街地の方で事件があつて、北街区への通行が規制されているのだろう。その影響で演奏役の何人かが来られなくなつたらしい」

「ああ、なるほど。それなら今日はもう、舞踏室は使いませんよね。そつちの掃除から先に済ませちゃおつかしく」

思案顔になるメイド長。

抗議の声を上げたのは、大階段に座り込んだツーサイドアップの少女だった。

「うえー。これ以上まだ掃除すんのー？ もういいじやん。お密さんだつて、そんな細かいところまで気にしないって」

シエリーと同世代の彼女は、ハウスメイド達の中でも最年少。メイド長の実妹で、名はリリ。年が近いこともあり、シエリーとの関係は主従とくつつけた友達感覚だ。

そんな妹の態度に、メイド長がゆらりと振り返った。

浮かべるのは物騒な笑み。

片手で器用に、モップをぐるりと回転させてみせた。

「へえー。」のあたしに口答えするなんて、あんたも随分と立派に

なつたものね。ちょっと再教育が必要かしら?」

「ひいっ、姉ちゃん待って！ 暴力反対！」

「問答無用っ！」

神速の踏み込み。

メイド長の放ったモップの突きは、見事の一言に及きた。
しかしそれを紙一重で躱したりリリの反射神経も、なかなかのものだ。

摩擦熱に焦げた毛先にぎょっとしながらも、リリが大階段を転げるようすに姉の間合いから逃れようとする。

もちろん容易く逃がすようなメイド長ではない。

空かたず！ 撃田を見舞おうとして、メイド長はその足を止めた。

「あの、お嬢様？」

振り返るメイド長。

すっかりスルーされてご機嫌を損ねたシェリーが、メイド長のスカートを掴んでいた。

「私の質問に答えるのだ。それでシャルロは、何時に帰つてくるのだ？」

「え？ それはちょっと分からぬですね。きっと市街地の方は、乗合馬車の運行も規制されてゐるでしょ？」

「何だそれは？ 困るだ！ 私は今すぐシャルロと遊びたいのだつ！」

シェリーは、ぱふぱふとメイド長のスカートを扇ぎながら叫んだ。もちろんメイド長にハツ当たりしたところで、意味がないことなど理解していた。

外出してしまったシャルロには、そもそも連絡を取る手段すらない。

ふと気が付くと、シェリーを見つめるメイド長が、自らの鼻先を押さえながら呻いていた。

「う、駄々っ子なお嬢様も、超絶可愛い……」

「姉ちゃん、鼻血！ 鼻血！ あと口元もやっぱー！」

身の危険を感じたシェリーは、思わずメイド長のスカートから手を離してしまった。

愛でるのは好きだが、愛でられるのは苦手だ。

気を落ち着かせたメイド長が、ハンカチで鼻血を拭つて場を仕切り直した。

「分かりました。それでは至急、シャルロを呼んで来させましょう」「本当か？ そんなことが出来るのか？」

「我が儘も言つてみるものだ。

内心、諦め掛けていたシェリーは、希望に瞳を輝かせた。

「もちろんです。お嬢様のためならば、無理を通すのもメイドの役目。リリ、あんたちょっと街まで行って、シャルロちゃん探しできなさいよ。辻馬車を使つていいから。ミスターに通行許可証を発行してもううわね」

「無茶振り来た―――ツ

当然のように指示を丸投げしたメイド長は、リリが驚愕のあまり目を剥いた。

ぶんぶんと手の平を左右に振る。

「いやいやいやー 無理だつてー シャルロちゃんの居る場所だつて分からぬのにー」

「そうでもないでしょ。メッセージの配達先は分かっているんだし。それにほら、シャルロちゃんつて街に出た時にはいつも、東街区の露天市場に寄るじゃない？ そこを狙えれば会えるつて」

「会えないって！ あそここの市場、すげい混雑するんだから！ 人ひとり見つけ出すなんて絶対無理！」

何とか抵抗しようとするリリを、メイド長がぎりりと睨んだ。つべつ、ヒリリが怯む。

「いいから黙つて、言つ」とを聞きなさこよ。可愛くないわね。はあ、あんたにショリーお嬢様の十分の一でいいから、可愛げがあれば良かつたのに

「ほひでそんな残念そうな顔されてもー 良く見てー あたしだつてそれなりに可愛い方だよ！」

「ええーー？ だつてあんたの顔つて、何故かあたしに似てるのよね。真似なの？ パクつてんの？」

「それはそうだよー 妹なんだからー」

リリの拒絶に、メイド長は深々と溜息を付く。

そしてジョリーに向ふと、母の話なをやうに苦笑してみせた。

「申し訳ありません、お嬢様。やつぱり駄目みたいです」

うるつとシェリーの瞳が潤む。

下手に期待してしまった分、落胆は大きい。

そして紺毯の上に転がると、シエリーは手足をはたはたと振り回した。

貴族令嬢としての「品位」完全に消失してしまった。

普段は大人顔負けに貴族然とした態度で振る舞うことも出来るシエリーだつたが、大好きなシャルロのことが関わると、途端に年相応のお子様以下だつた。

「ジーラーさんの方が、いた。いつまつりや、ハーリーちゃん、しばり
く落ち着かないよ。」

「あーん、たまんないわー。幼児退行しちゃつたお嬢様も、可愛らしい。あたしとしてはこのまま、ショリーお嬢様のあられもない姿を観賞してみたいところなんだけど」

「まじで？ 姉ちゃんの趣味おかしいよつ？」

「でもまあ、そりゃ言つてられないわね。仕方ない。あんたに任す

やれやれといった様子でメイド長が、ぽんつとリリの肩を叩いた。
子供のことは、子供に任せておくのが最適との判断。
つまりは事実上の全権委任だった。

「やつほーー！　じゃあ、あたしは掃除しなくてもいいよね？」「

「はいはい。後はあたし達でやつておくから。あんたはシャルロちゃんが帰つてくるまで、ショリーお嬢様の相手をして差し上げなさい」

「了解であります！」

敬礼の真似事をするリリ。

床で駄々をこねていたショリーは、リリに無理矢理引き起こされた。

「ほらほら、涙を拭いて鼻もかんで。シャルロちゃんが戻つてくるまで、あたしと遊ぼ」

「うぐ。しかしシャルロも居ないのに、何して遊ぶのだ？」

「ふふ、甘いわねショリーちゃん。シャルロちゃんの居ないつまにしか、出来ないことがあるじゃない」

リリが人差し指を唇に当てて、にんまりと微笑んでみせた。
自信満々な表情が心強い。

鼻をすすり上げながらも、ショリーはこくりと頷く。
行動派のリリは、いつでも子供達のリーダー役だ。
もちろん引っ張り回したり、トラブルメーカーになることが多い

のだが、そんなリリがシェリーは嫌いではなかつた。

「さあ！ 姉ちゃんの気が変わらないつちに、早く行こー。」

リリに手を引かれながら、シェリーは玄関ホールを後にする。先ず向かうのは、おそらくキッチンの洗い場だろう。

かつてのシェリーは、教科書通りに模範的な貴族の令嬢だつた。当時は身分違いのリリ達と遊ぶようなこともなかつた。父兄から溺愛を一身に受け、その期待に応えることだけが自らの存在価値。

ノブレス・オブリージュ。

高貴なる義務に対するプレッシャー。

感情を押し殺し、人形のように過ごす空虚で退屈な日々。

全ての価値観が一変したのは、シャルロと出会つた事件がきっかけだ。

シェリーが思い込んでいたより、世界はずつと広くて刺激に満ちていた。

狭い世界に引き籠もつていた、あの頃にはもう戻らない。

幼年期に失われた子供らしさを取り戻すように、シェリーは遊ぶ時はいつだって全力であろうと心に決めていた。

シェリーを見送つたメイド長の傍らに、そそそとパーラーメイドが寄り添つてくる。

ハウスメイド達のシンプルな制服と違つて、フリルやレースに彩られたビジュアル重視なメイド服。

胸元や背中の露出度も高く、着る人間を選ぶデザインだ。明らかに作業向けではない。

それもそのはず、彼女に与えられた本来の主業務は接客。たまたま今は、掃除の手伝いに駆り出されているだけに過ぎない。

「あらあら。シエリーお嬢様も、恋に恋するお年頃になられたのですね。これはわたくし達も、負けてはいられませんの」

「何の話よ？」

パーラーメイドに意味深な眼差しを向けられ、メイド長がたじろぐ。

「嫌ですわ、お姉さま。今夜からいらっしゃるというお客様、かなり高貴なお方なのでしょう？ それもわたくし達に近いお年頃だから。これはもう、上流階級に入り込む千載一遇のチャンスですの！」

「何であんた、そこで胸元を広げるのよつ！」

「いえ、ここは一つ、お色氣で愛人の座でも狙おうかと」

パーラーメイドが悪戯っぽい目で微笑む。

ただでさえ豊満な胸元が、今にも溢れそうだった。

同性であるメイド長でさえ、思わず視線のやり場に困つてしまつ。

確かに彼女が指摘する通り、訪れるのは公爵家に名を連ねる客人だ。それも一人。

四大公爵家のうち、二家の関係者が揃うことになる。

そこまでの要人が、領主不在のオフシーズンに長期滞在するなどかなり珍しい。

興味はあったが、メイド長としては深入りする気もなかつた。

立場は弁えている。

「あんたね、身分違いの恋なんて、成功例が少ないからこそ物語になるのよ？ 相手はショリーお嬢様みたいに、純粋無垢な子供じゃないんだからわ。あまりお勧めはしないわね」

「つふ、まあ見てて下さい。次々期公爵様の愛人になつた暁には、お姉さまをハウスキー・パーとして雇つて差し上げますわ」

「その自信は、どこから出でてくるのよ」

呆れたように嘆息するメイド長。

ただ、パーラーメイドの人生だ。

彼女の好きにさせるしかない。

それでもメイド長として、釘を刺しておくれだけは忘れなかつた。

「ひとつアドバイスしておくと、今回のお客様は男女ペアだからね。あんたの入り込む余地なんてないかもよ？」

「略奪愛！ ますます燃えますわ！」

「……あんたもいゝ根性してるわよ。ま、がんばって」

駄目だこれは、重症だ。

夢見る乙女は止まれない、ロマンチック症候群だろうか。

気合いを入れるパーラーメイドとは対照的に、メイド長は疲れ切つた様子でがっくりと頃垂れた。

貴族に弄ばれて、救貧院まで身をやつしたメイドの話など、それ

こそ掃いて捨てるほど有り触れている。

現実は恋愛小説ほど甘くはないのだ。

パーラーメイドも一度くらいい、痛い目を見た方がいいかもしだい。

もちろん取り返しが付かなくなる前には、止めてやるつもりだった。

「さあ、無駄口はお終いにして、仕事仕事！ ミセスに怒られるの、あたしなんだからね」

「へーい」

緩んだ空気を引き締めるよつこ、メイド長が手を打ち鳴らす。

同僚のメイド達が気の抜けた返事をして、それぞれの持ち場に戻つていった。

パーラーメイドも布はたきを持って、調度品が並ぶ棚へと駆けていく。

「身分の壁を越えた大恋愛か。あたしなら願い下げね」

別にメイド長は、貴族の全てが嫌いという訳ではない。

フローマス伯爵家の人々のことは敬愛しているし、下級貴族である地元騎士団には顔見知りだつている。

それでも、大して交流のない上級貴族に対しては、身構えてしまうというのが本音のところだ。

仕事として割り切ればもちろん失礼なく接してみせるが、プライベートでまで関わり合いになりたいとは思わなかつた。

それに爵位持ち貴族には、トラウマ級の苦い想い出だつて抱えている。

「お姫様こま、心かく済へぬよ」。なんてみんなこまは教えている
けど、あたしもまだまだ精進が足りないわよね。貴族アレルギーも、
それなり本気で治さなくちゃ」

理由でな分かっていても、やつ簡単に直せないのが気持ちの問題
とこつやつだ。

メイド長は廊下達に聞こえないうち、そつとひと言いた。

第1話・04 カントリーハウス2

ヘイウッド邸の応接間は、玄関ホール奥の食堂から扉をひとつ越えた先にある。

本来の用途は、食堂で晩餐会を楽しんだ客人が、男女に別れてひとと息入れるための部屋だ。

今夜の夕食会は略式のため、朝食室を使う。

そのため応接間の用意は、後回しにされていた。

シェリー達の遊び場として解放されているのは、そんな理由だ。

「第十三回、シャルロちゃん攻略会議～」

リリの直前に、シェリーがぱちぱちと手を叩く。

「シェリーちゃん、まだ諦めてなかつたの～？　ああ、またじつせ失敗するんだあ」

ネガティブな意見を挟んできたのは、スカラリーメイドのエリカだ。

年齢が近いせいで、リリやシャルロと同じく、シェリーの遊び相手を務めることが多い。

メイド服は薄い水色。

くせつ毛にメイドキャップを付けている。

かなり控えめな性格で、いつもシェリーやリリに振り回される立ち位置だった。

「前回のお医者さん、ひつひつでは、作戦の開始前に逃げられてしまつた。あまり露骨なのは、警戒されるようになつてしまつた。これは由々しき事態だ」

「だから言つたのにつ！ これもショリーちゃん達が、えつちなことしきたせいだよ！」

「む、どれのことだ？ 前々回の王様ゲームのことか？ それともその前の、着せ替え？ いか？」

「全部だよ！ ショリーちゃん、もうひみつと皿皿すべきだよ。このままじゃ本当に、シャルロちゃんに嫌われやつよ。」

エリカの指摘は、もっともだ。

押すばかりでは相手に引かれるばかり。理屈ではショリーだつて分かっている。

しかしこの情熱を抑えることなど出来そうにはなかつた。

「確かにショリーちゃんは貴族の『令嬢なんだから、もっとエレガントな遊びを追求すべきよね』

「リリまでそんなことを言い出すのか。私はもっとストレートに、シャルロといちゃいちゃしたいわ」

しかしショリーの不満は、杞憂だつた。リリが、にやつと口角を上げる。

「乗馬？ ことか、貴族っぽくない？」

「コインストスの結果、最初の馬役はエリカになつた。騎手役がショリーだ。

遊びに関しては、貴族と使用人の身分など関係ない。

子供の遊びに、大人の事情は持ち込まないと。

それはシェリー自身が取り決めたヘイウッド家のルールだった。

ふかふかな絨毯の上、四つん這いの姿勢になつたエリカに、恐る恐るといった様子でシェリーは跨つた。

お尻の下にエリカの背中を感じる。

「おおー、いいんじやないかつ？ 何だか興奮してきただぞー。」

「やつぱりわたしが馬役なんだ～。うう、どうせこいつなるつてことは、分かってたんだ」

ぶつぶつ文句を言いながらも、結果には渋々と従うエリカだった。ネガティブな言動の田立つヒリカだったが、実のところ付き合いは良い。

小さな背中が揺れて、シェリーの上体がふらついた。

「何だらひ、この高揚感つ。支配している感じが素晴らしいぞ！ シャルロに恥骨を押し付けていると思うと、想像だけでたまらんな！」

「シェリーちゃん、あんまり腰を動かさないで～。くすぐりたいよう

「う

鼻息も荒く興奮するシェリー。

対してシャルロの身代わりになつているエリカは、ドン引きだ。それでもエリカは、部屋を一周してくれる。

元の位置に戻つてくると、シェリーはエリカから降り立つた。

「なかなか面白かった！ シャルロが帰つてくるのが楽しみだな～！」

リリの発案を聞いた時には、正直、そんな子供っぽい遊戯なんてと思っていた。

しかし、嗜虐心の刺激により、新たな快感に目覚めてしまいそうになる。

何より、下半身を密着させつつの上下運動という行動が、たまらなく背徳的で素晴らしい。

「ふへ、ふへへ」

妄想に頬がだらしなく緩む。

一方、起き上がってスカートの膝を払っていたエリカが、作戦の決定的な問題点を指摘した。

「シャルロちゃん、きっと馬役なんてしてくれないよう？ それに『インストスで勝てるとは限らないし』」

「む。それは確か、手品用のコインがあつたよくな……」

「それ詐欺の手口だからね？」

「シャルロとえっちなことをするためなら、手段は選ばないぞ！」

「ふつふー。二人とも甘いわね」

シヒリーとエリカのやり取りを、リリが鼻先で笑った。

ソファにふんぞり返つて、まるで演劇に出てくる悪者の親玉みたいな貫禄だ。

「偶然の要素に頼るなんて、作戦としては下策よ。相手に『見える選択肢をさりげなく絞り込んだ上で、どうに転んでも勝てるようこしないとね』

「何だ？ リリには良いアイディアがあるとでも思つのか？」

「もちろん。あたしがお手本を見せてあげる」

自信満々にリリが立ち上がった。

「じゃあ今度は、あたしとエリカちゃんで組もうか」

「えへ、わたしあつ疲れた。リリちゃんとショリーちゃんと遊んでよう」

エリカが泣る。

それはそつだらう。

「ポイントスに負ければ、また馬役をしなければいけなくなる。

エリカの気持ちは、ショリーでも何となく分かった。

「そんなこと言わないで。ほら、あたしが馬役をするからさ」

「本当？ セーリーじとなら」

「ポイントスなしで騎手役になると聞いて、エリカが心変わりする。

四つん這いになつたリリの背中に、エリカが小さなお尻を乗せた。お馬さんの姿勢になつたまま、リリがショリーに尋ねてくる。

「シーリーちゃん、乗馬！」では騎手役になつた方が勝ちだつて

思つてゐるでしょ?「

「それはそうだろう? 何故に好き好んで、馬にならんといかんのだ?」

「ふふ、その先入観が大間違いなのよ。まあ、見てなさい。エリカちゃんのことをシャルロットちゃんと思つておくれ、あたしの言つてる意味が分かつてくるから」

そつ言つなりにりは、いきなり嘶き声を上げて仰け反つた。

「ちょ、リリちゃん！ 暴れないで！」

「ひひん！」

昂ぶるリリから落ちないようになると、エリカが慌ててその身体に抱き付いた。

リリが暴れるばー、ぎゅーっとエリカの抱き付きが強くなる。
両手両足で絡み付くように抱き締められても、リリはますます荒
ばー、ニミミミ。

「なるほどー。その手があつたか！」

シェリーは手を打つて納得した。

今まではシャルロに抱き付こうとして、逃げられてばかり。
逆に抱き締められた記憶など、ほとんどない。

抱かれたい!

「おおーっと遺されたゆづな激しだ、抱き締めてほし。」

シャルロの身体の柔らかさ、香り、体温。

駄目だ

妄想しただけで、涎が出てきた。

「ほりほりつ、騎手なら鞭を入れてくれないと！　あたしのお尻を叩くのよー。」

「え?
えええ~?」

「遠慮しないで！ 早く！」

急かされたエリカが、目を回しながらモリリのお尻を触る。

גַּם־יְמִינָה

かなり良い音が響いて、エリカの平手がリリのお尻に炸裂した。

「あひいツ」

「だ、大丈夫つ？ 強すぎちゃつた？」

叩いたエリカの方が驚いて、リリに尋ねる。

しかし、ハアハアと荒い息で頬を上気させるリリの表情は、何故か恍惚としていた。

「流石だ、リリ！ その極意、確かに私にも伝わったぞ！」

「どう? シンリーちゃんにもこの遊びの楽しみ方が分かつた?」

瞳を爛々と輝かせるショリー。

シャル口にお尻を叩かれる。

そんなシチュエーションなど、妄想の中だけかと思っていた。

それが、現実になる。

これはもう、一気に大人の階段を駆け上るチャンスだ。

考えるだけで、むずむずと抑えきれない感情が沸き上がりつてくる。

「よし！ リリそこを代われ！ 今度は私が馬役をやるぞ！」

「ええ～～？ あたしはもう休みたいんだけど……」

「何だ？ エリカも馬役をやりたいのか？ それなら公平にコイントスするか？」

「……いえ、騎手役でいいですぅ」

どうやらお子様なエリカには、リリの伝えたかった楽しみ方がいまいち理解出来なかつた様子。

早速リリと交代すると、騎手役の時にはなかつた快感が見えてくる。

上に乗られる屈辱感。

背中に感じる、可愛らしいお尻の感触。

馬役のショリーが暴れるほど、騎手役のエリカは無我夢中で抱き付いてくる。

ショリーの発育途上な胸を鷺掴みにしている」とこすり、エリカは気付いていないだろ。

スキンシップされ放題だ。

「いいぞ！ これはいいぞ！ シャル口が帰つてくるまで特訓だ！」

「次はあたしが馬役交代ね」

「もうやだ〜、あたし限界〜」

結局のところ、狂乱の宴は小一時間ほども続くことになった。
絨毯の上に転がる、小娘が三人。
着衣は乱れ、髪もひどいことになっている。
肌は汗にしつとつと湿り、荒い息づかいに小さな胸が上下していた。

「くふふ、」これでシャルロがいつ帰つても、バッヂだな
「ちよっとやうすぎたわね。シャルロちゃん帰つてくままでに、体力
回復させなくちゃ」

「うふ、わたしもう吐きそう。いつぞ、殺して〜」

疲れ切つているはずなのに、ショリーとリリの一人には、やり遂げたような笑みが浮かんでいる。

一方のエリカは、息も絶え絶えで顔色も悪い。

水も飲むことを辛そうだ。

そんな仰向けに倒れて呼吸を整える少女達の視界に、すりと長い脚が映った。

視線を上げると、フリルに黒いスカート、そして白いHプロン。

お子様達の様子を見に来た、メイド長だった。

リリの枕元に仁王立ちして、一めかみに怒りマークを浮かべながら物騒な笑顔を浮かべている。

「ねえ、リリ？ あたし、今夜は新しいお客様がいらっしゃるって言わなかつたつけ？」

「姉ちゃん、ちょっと待つって。今あたし動けないから、小言はまた後で聞くわ」

「それがどうして、こんなに応接間が散らかってるの？ お嬢様にまですっかり汗をかかせちゃって。これじゃ湯浴みしていただかなーいと、お客様を出迎えられないじゃない。本当にあなたは、余計な仕事を増やすことについては天才的よね」

「あれ？ もしかして姉ちゃん、怒つてたりする？」

リリの顔が青ざめる。

隣でエリカが、「あーあ、わたし知らなーい」と他人事のように息をついた。

「乗馬じーじーだっけ？ とっても楽しそうね。あたしも混ぜてもうえないかしら？ ほら、さつさと四つん這いになつて、お尻をじーじーに向けなさいよ。あたしが愛の蹴りをくれてやるから。ふふ、しばらくなは楽して椅子に座れると思わないことね」

「ひいひ、姉ちゃん田が怖い！ 田がー！」

仰け反るリリだったが、疲れ果てている今の体力では、いつものように逃げることが出来ない。

リリがメイド服に叱られるのは、すっかりヘイウッド家の風物詩の一つだが、今回の件はショリーにだって責任がある。

乱れたドレス姿のままショリーは上体だけ起き上がると、メイド

長に嘆願する。

「遊びすぎた件については、本当にすまない。ただ、リリは私の遊びに付き合ってくれただけなのだ。仕置きは見逃してくれないか?」

「ショリーちゃん、ありがとうー。姉ちゃんにもうと書かれてやつてー!」

対してメイド長は、慈愛に満ちた笑みを浮かべてみせた。
優しく諭すようにして、ショリーに説明してくれる。

「じ心配には及びませんよ、お嬢様。リリはこーいつ風に責められるのが、大好きなんですから。むしろ!」褒美?「

「そ、そつなのか? 褒美なら仕方ないな」

「ショリーちゃん、そんな簡単に言いくるめられないでーーー?」

リリの悲鳴が、屋敷に響き渡る。

すっかりヘイウッド邸の風物詩だ。

白田でぴくぴくと痙攣するリリを横田に、ショリーはメイド長に尋ねた。

「シャルロは、まだ帰つてこないのか?」

「んー、この時間なら配達の仕事は終わっていると思いますよ。今頃、東街区の露天市に寄り道して、お土産でも買つているんじゃないかしら」

「 そ、う、か。客、人、よ、り、も、先、に、帰、つ、て、く、る、と、良、い、な、」

折角の作戦も、シャルロが居なければ意味がない。
客人達が訪れてしまえば、子供の時間は終わりだ。
その前に、シャルロには帰ってきてほしかった。
シェリーは少し寂しそうに時計を見上げた。

シャルロのお気に入りだとこつ露店市は、東街区の一画にあった。大通りから一本奥に入った裏通り。

公共スペースであるはずの路上には、無認可の不法屋台が所狭しと建ち並んでいる。

悪名高い東街区であつても、露店市の全てがブラックマーケットだというのは偏見だ。

大半の露店で扱っているのは、じく普通の日用品や食料品の類だつた。

『オレンジ一つで銅価一枚ですか。店主、それは適正価格と言えるのですか？ ぶち殺しますよ？』

『勘弁してくださいよ、田那。つちは産地直送の高品質が売りでし。て。ほら、香りからして違うでしょ？ 一つ差し上げますから、試食どうですか？』

『おや、催促したつもりはなかつたのですが。ありがとうございました』

果実店の軒先で店主とやりあつているのは、鎌帷子の上から濃緑の制服を着込んだ短髪の女性だった。

生真面目そうな女性で、鋭い目付きに油断ならない光を宿す。

この辺りは東街区でも特に、王国系の移民が多い区画。交わされる言葉も王国語だ。

オレンジを受け取つた女性は、自分の服でじじじと擦ると皮のまま齧り付いた。

『ん、確かに美味です。まあ、いいでしょう。今日は取り締まりに来た訳でもありませんし』

女性が僅かに口元を緩める。

店主も愛想笑いを返そうとして、顔が引きつってしまった。

フローマス騎士団。

それも正騎士が訪れるなど非常事態すぎる。

騎士団は東街区につるさく口出しをしない。

代わりにその住民を保護もしない。

それが不文律だったはずだ。

慣習を破つて土足で踏み込んでくるところは、それだけ今回の事件に力を入れていることの証。

どんな理由にしても、店主にとつては迷惑な話だった。

正騎士ともなれば、普段この辺りで見掛ける平民出身の徴集兵とは持つている権限が違う。

うつかり対応を誤れば、店主の不法屋台など簡単に取り潰されてしまうだろう。

『本題に戻りましょう。良く見て下さー。その顔、本当に最近は見掛けていませんか?』

オレンジの汁がついた指先を舐めながら、女騎士がチラシを指差しつつ回答を促す。

騎士と言つても、所詮は地方領主に仕える下級貴族。

富庭で社交ダンスを踊るような優雅さとは無縁だ。

どちらかと言えば、戦場で剣を振るつている方が似合つている。

表情の下からチラリと覗く容赦のなさは、その辺のマフィア顔負けだった。

いや、融通が利く分だけマフィアの方が百倍はマシだろ？
国家権力とは、最強の暴力機関でもある。

店主の手に握られているのは、重要参考人の手配書だ。
そこには若い男の顔が、報奨金の金額と共に描かれている。
見覚えはあった。

以前このストリートに居着いて、似顔絵描きを生業としていた若者だ。

絵描きは移民街でも天涯孤独な身で、店主も特に親しくはなかつた。

恨みもないが、助けてやる義理もない。
その所在を知つていれば、店主は尻尾を振つて情報提供しただろう。

しかし、本当に知らないのだから提供出来る情報もない。
緊張する店主の表情を、ねつとりと睨み付けるように観察する女騎士。

やがてシロだと判断したのだろう。
すっと身を引くと、嘆息混じりに肩をすくめてみせた。

『知らないのならそれで構いません。ただ、もし見掛けたらすぐに連絡を下さい。隠し立てなんてしたら、ぶち殺しますからね？』

女騎士が銅貨を一枚放り投げた。

そのまま果実店に背を見せると、隣りの露店へと足先を向けてくれる。

はーーっと店主は安堵の息を吐いた。

見渡すとストリートには、彼女の部下と思われる傭兵達の姿がちらほらと見える。

かなり本腰を入れた捜査体制を敷いている様子だった。

『あは、店主さん災難だつたですね』

騎士達が居なくなつた頃合いを見計らつよつにして、果実店の軒先にひょつこりと可愛らしい顔が覗いた。

東街区には珍しい、綺麗な身なりをした子供のメイドだ。まず目に付くのが、蒼い光を湛えた瞳。

透けるような白い肌は、桃色にうつすらと色付いていた。日の光にきらきら輝く銀髪を三つ編みにまとめて、ちよこんと力チューシャを乗せている。

『おひ、シャルロちゃんじやねえか!』

先程までの緊張ぶりが嘘のよつに、果実店の店主が明るさを取り戻した。

豪快に笑いながら小さな頭を乱暴に撫でつける。

シャルロと呼ばれたメイドが、くすぐつたそつに首を竦めた。

シャルロの身につけたメイド服は見るからに高級品で、ボロ布を纏つたガキ共が多い東街区ではかなり浮いている。

それもそのはず。

シャルロはこれでも、子供ながらにしてヘイウシード邸の正式な使人だつた。

『あの、それでですね、今日はオレンジを四つほしいのですよ』

『はつはつはつー、四つなんてケチなこと言わねえで、好きなだけ持つていきなー!』

あわわと瞳を白黒させるシャルロから手提げ袋を奪い取ると、店主がはち切れんばかりにオレンジを詰め込んでいく。

そしてシャルロの薄い胸元へ、押しつけるよつと手渡した。

『おじけちゃんの気持ちだからよー 遠慮しないで受け取つてくれやー』

『こんなに持てないですよつ』

シャルロが溢れそうなオレンジの丘を抱え込み、落とさないよう必死にバランスを取る。

あたふたする小さなメイドを温かな手で見守りながら、店主は満足そうに頷いた。

そんな店主の耳を、ぬつと伸びてきた手が捻り上げる。

『痛ててててて！ 千切れる！ 千切れるつてば、おこー！』

『あんた、また鼻の下伸ばしてー なに店の商品、勝手にサービスしちまつてのさー』

店番を交代しに来た女将だった。

尻に敷かれっぱなしの店主と比べて、じつちが店主の主なのが分からぬいぐらいの貴様つぱりだ。

『女将さん、こんなにちはです。あの、これやっぱお返しした方が良いですよね？』

『いいくて、いいくて。じつはこのバカが仕入れすぎたせいで、余るんだからや。屋敷のみんなで食べてもらつてよ』

店主には厳しくても、シャルロには優しい女将だった。
不公平すぎる。

この露店市通りにおいて、シャルロは密でありながら看板娘的な扱いだった。

店主連中からだけではなく、女将達からも好かれている。

扱いの温度差に、店主は恨めしげな目を女将に向けた。

『そりいえばあんた、さつきあの騎士様から何のチラシ受け取つてたんだい？』

『おう、これか』

店主が懐からぐしゃぐしゃになつた手配書を取り出した。シャルロと女将がその紙面を覗き込む。

そこには印象の薄い顔をした、若い絵描きの姿が描かれていた。

『ふーん、確かにこの子、近頃は見掛けないね。一体、何をやらかしたのや』

『田撃情報だけで金貨五枚ですか！ すごいのですよー。』

似顔絵の下に記載された金額に、シャルロの目が釘付けになる。ちなみに生け捕りなら金貨一十枚。

貧民街の住人なら一年は軽く遊んで暮らせる金額だ。

殺人事件の容疑者にだつて、これだけの懸賞金は付かない。

『ほら、連続騎士襲撃事件が騒ぎになつてるだろ？ その関係だつて噂だぜ』

声を潜めて店主が囁いた。

フローマス騎士団の関係者ばかりを狙つた襲撃事件。

新聞を読めない店主のような下層階級でも、大まかな概要ぐらい

は口伝えで耳にしていた。

手配書の絵描きが事件に関するのなら、騎士団の力の入れよつも納得がいく話しだ。

『やだやだ、物騒なことで。あの絵描き、暴力沙汰に関わるような子には思えなかつたけどねえ。人は見掛けに寄らないもんだよ』

『はー、それは恐ろしいお話なのですねー』

『シャルロちゃんも人ごとじやないよ。あんた身なりもいいし、可愛い顔してるからさ。襲われないよう気を付けな。この移民街でシャルロちゃんに手を出す輩は居ないけど、最近は余所者だつて増えてるからね』

『おう、仮に襲われそうになつたら、おじちゃん達を頼つてくれよ。ストリートの店主連合で、直ぐに駆け付けるからな』

『バカかい、あんた。襲われてからじや遅いよ』

『あは、お一人ともありがとなのですよ』

本気で心配をする店主夫婦のやり取りを見て、シャルロがにっこりと微笑む。

天使の笑みだ。

思わず店主の頬もだらしなく緩む。

そんな店主の足下を軽く蹴り上げながら、女将がシャルロを午後のお茶に誘つた。

しかし今日は屋敷に新しい客が来るということで、シャルロは早めに帰つて準備に掛からないといけないらしい。

女将は残念そうな顔をしたが、仕事は大切だ。

『じゃあ、今度来る時はもうへつこつとおくれよ』

『じゃあ、今度来る時はもうへつこつとおくれよ』

『はい！ 必ずなのですよー。』

ペーリと頭を下げる、シャルロが果実店を後にする。オレンジを落とさないように、頼りない足取りでバランスを取る後ろ姿がまた可憐らしい。

そんな様子を見送りながら、女将がしみじみと呟いた。

『いやあ、それでもいい子だねえ』

『だら？ まじでシャルロちゃんは俺らのアイドルだぜ』

『どうしても、そのにやけた顔は気持ち悪いから上めなー！』の口

リコン親父がー。』

『痛てててー！ だから何度も耳を引っ張るなってー！ もげるー！ もげるー！』

シャルロの目がなくなつた途端に、容赦のなくなる女将だった。その手が止まつたのは、露店市通りの奥の方から悲鳴と罵声が聞こえてきたからだ。

何事かと顔を見合わせる店主と女将。

騎士団が揉め事を起こしたのかと思つたが、ビーナスが違つただ。徐々に露店が近づいてくる。

それほど大きな市場でもない。

騒ぎの元が果実店の前を通り過ぎたのは直後のことだった。

通行人を次々と突き飛ばしながら、一人の若者が果実店の前を走り抜ける。

通行人の一人が屋台へ倒れ込んで、売りもののオレンジがばらばらと路上に転がった。

『馬鹿野郎！ どこ見て走つてやがる！』

倒れたままの通行人が、相手に怒声を投げつける。

しかし若者の背中姿は、ストリートを端まで抜けて何処かの路地へと消えた後だった。

『速えー。なんつー脚力だ』

店主が呆然と咳く。

怒る気力が失せるほど、見事な俊足だった。

『ねえ、あんた。今の走つてた子、もしかして……』

『ああ。目撃情報だけでも金貨五枚だっけか？』

女将の声に、店主が頷く。

若者が走り去った後を眺めながら、店主は手配書を握りしめた。騎士達はつい先程、露店市での聞き込みを終えて撤収したばかりだ。

それほど遠くには行つていないはず。

近くの大通りに馬を用意していないなら、走れば直ぐ追いつく距離に居るだろ？。

『あんた！ 早く騎士様を呼んできて！ 金貨五枚だよ！』

『おつー』

露店市に居る誰もが同じ事を考えたはずだ。
皆が一斉に四方八方へと走り出す。
移民街の露店市通りは一瞬で、蜂の巣を突いた様な騒ぎに巻き込まれた。

港湾都市フローマスの東街区を上空から見下すと、無秩序に増殖してきた街並みが広がる。

都市計画に沿って開発された北街区の整然とした景観とは対照的だ。

火事の延焼を防ぐために大通りの幅だけは厳しく規制されているが、それ以外のブロックは小汚い家屋が密集するように犇めき合っていた。

そんな今にも崩れそうなボロ屋の屋根上を、コリンはかなりの速度で駆け抜けていた。

すぐに足場が途切れ、薄汚い通りが眼下に広がる。しかしコリンに躊躇はない。

通りの幅は数メートル。

屋根から屋根へと、一気に跳躍する。

作戦局の制服である青いコートが大きく翻った。

「いいぞ！ 距離およそ四百メートル！ 目標はすぐそこだよ！」

「了解です！」

脳裏に直接響くのは、後方からコリンを追いかけているはずのフレデリカ先輩の声だ。

聞こえるのは声だけで、姿は見えない。

返事をしたコリンが、たんつと次の屋根に着地。勢いを活かしたまま、さらに前方へ跳ぶ。身体が軽い。

周りの景色が、すつ飛びように後ろへ流れていく。

「この空を駆けるような爽快感は、コリンが竜騎士になつて良かつたと思つことの一つだ。

法術。

神が定めた自然法則に干渉する術の総称。
かつて奇跡や魔術と呼ばれていた事象を、ヒトは体系化する」と
に成功した。

記録に残る最初期の研究は、一百年年前に著された一冊の禁書だ。
教会が公に認めて実用化されたのは、やうに時代が下つておよそ
百年前。

急速に開発は進み、三十年前には法術といふ名の技術革命は、戦
場の様相を一変させていた。

各国で繰り広げられる、法術の開発競争。

近年の流行は、竜騎兵と呼ばれる兵科での応用研究だ。

コンセプトは騎兵の突破力強化。

長槍の方陣に対し時代遅れとなりつつあつた騎兵は、火器と法
術の登場で、再び戦場の主役となつた。

「法術の稼働状況、全て異常なし。もう少しじだけ出力を上げてみよ
うか？」

「はい、お願ひします！」

ぐんっと加速度がさらに増す。

竜騎士法術には身体能力の強化法術を中心に、防壁法術、攻性法
術、通信法術などがパッケージングされている。

コリンの身体中にも、血管のような緻密さで法術回路が焼き込ま

れていた。

士官学校の在学中に、法術職人でもあるフレデリカ先輩によつて設計されたものだ。

会戦での竜騎士法術は、特別な軍馬や馬上槍とセットで運用される。

しかし、コリン達の任務は帝国領内に限られており、前戦での正規戦も想定されていない。

そのため過度な重武装は持ち合わせていなかつた。

それでもなお、コリンの単体戦力は常人のそれを大きく凌駕している。

「油断するんじゃないぞ。思わぬところで足下を掬われないようこゝに気を付けるんだ」

「もう学生じゃないんですから、分かつてますよー。」

開発元の国によつて、同じ竜騎士法術でもそれぞれ癖がある。

帝国式における最大の特徴は、騎士と術士とのツーマンセル運用だらう。

二倍の人員が必要という欠点はある。

しかし、それを補つて余りある利点があつた。

他国の大騎士法術では、騎士が戦いながら同時に術式制御を行つことが一般的だ。

そのため目の前の戦闘に集中出来ず、仕様通りの性能を發揮出来ない。

もちろん天才と呼ばれるエースは存在した。

しかし、戦争は数の限られる天才だけに依存して行つものではない。

帝国式であれば、騎士は目前の戦闘だけに専念すれば良かった。

法術制御は、専属でサポートに当たる術士の仕事だ。

だからコリン自身が、複雑な術式を操る必要はない。

それらは全て、フレデリカ先輩がリモートで行っていた。

コリンの視覚及び聴覚情報は、リアルタイムで先輩にも共有されている。

個人のプライバシーなんてものは、一切考慮されていなかつた。逆に先輩からコリンへの指示は、音声イメージ化された思考伝達のみとなる。

不公平すぎだ。

コリンだつて先輩の視覚を盗み見してやりたい。

しかし残念ながら、コリン自身に一人分の情報を処理する能力などありはしなかつた。

「どうだい、コリン。初日からターゲットに接触できるなんて、東街区に寄つて正解だつただろ？ まさにボクの計画通りだよ！」

声だけしか聞こえないのに、先輩の得意気な顔が目に浮かぶ。

「計画というか、どう見ても悪運が強かつただけでしたよ？ 明らかに先輩、あの人があの人が目標だつて分からぬで話し掛けましたよね？」

「いきなりの攻撃には、さすがに驚いたけどね。ま、何れにしても逃がしはしないよ」

ローン、ローンと響くように感知出来るのは、フレデリカ先輩が並列起動している測距法術の探査波だ。

「コリン達が追跡しているのは、かつて絵描きだった若者。連続騎士襲撃事件の重要な参考人だ。

フローマスに到着して早々に、絵描きと遭遇出来たのは幸運以外の何ものでもない。

突然の不意討ちぐらいは、*iji*愛敬。

あの状況から咄嗟にビーコン術式を打ち込めただけでも上出来と言えた。

「しかし、生かしたまま捕縛とは面倒だね。ビーコン術式の代わりに攻性法術でも撃ち込んでいれば、こんな手間は掛からなかつたかもしれないのに。」

「それ大惨事ですから！ 帝国領内の市街地で無茶しないで下さい！ おまけに重要参考人を殺しちゃつたら、本末転倒もいいところですよ。」

「攻性法術にするべきかどうかは、本当に少し迷つたんだよ？ ボクの見込みではある絵描き、その程度で死ぬようなタマじやないからね。あ、目標の進路が曲がつた。三時の方向に調整したまえ！」

「それにしてもこの法術、すごい便利ですね。先輩のことを見直しました。」

「もつと讀えたまえよ！ ま、正直なところ使い勝手はいまいちだけどね！」

確かに万能ではない。

分かるのは、目標までの方角と距離だけ。

そこに辿り着くための道順は、自分で考へるしかなかつた。

道に迷っていたコリンやフレデリカにとつて、それは致命的な問題。

そこでフレデリカ先輩が指示したのが、機動力に優るコリンを行わせるプランだ。

竜騎士のコリンなら、建物や地形は障害にならない。
最短距離を一直線だった。

「それにしても相手の絵描き、相當に人間離れしていますね。走行速度が異常です。単騎のようですし、王国式の竜騎士法術でも使つていいんでしょうか?」

「いや、ボクの予測通りなら、どの国の法術にも当てはまらないね。人工のコピー技術ではなく、恐らくは天然。会敵する時には十分に注意したまえ」

いくら絵描きの足が速いと言つても、障害物の多い地上を走るのでは限界がある。

中空をショートカットするコリンは、じりじりと絵描きまでの距離を縮めつづつあった。

「距離およそ一百メートル! 方角、十時に調整!」

「ひたすらでも目標を捕捉しました!」

コリンの研ぎ澄まされた聴覚が、市場から聞こえる騒ぎを捕らえた。

目標は近い。

懐から单発式の法札を取り出すと、法力をチャージする。

ちなみに貧民街の建物には、木板を貼り合わせただけの粗末な造

りが少くない。

それも新築から築数十年の腐りかけ物件まで、無秩序に混在している有様だ。

中には当然、数メートルも跳躍してきた人体の衝撃に、耐えられない建物だって少なからず存在していた。

むしろ、ここまでそうしたボロい構造物に当たらなかつた事が、かなりの幸運だつたと言えるだろ?。

「は?」

だからコリンの足下の屋根が、何の手応えもなく破壊されたのはむしろ必然だつた。

バキヤツと木片が碎け散り、足場を失つたコリンがバランスを崩して宙へ放り出される。

土地勘のある絵描きが、何故わざわざ地上を走つて逃げていたのか。

その理由によつやくコリンは思ひ至つた。

第1話・07 フローマス騎士団2

屋根上を軽快に跳んでいたコリンの足下では、フローマス騎士団の兵士達が、錯綜する情報に翻弄されながら走り回っていた。

『間違いないのですね?』

『へへ、もちろんです。それで田那、田撃情報の金貨五枚つてのはいただけるんですよね?』

果物屋の店主が、代表して尋ねる。

場所は東街区の露天市ストリート。

呼び戻された小隊指揮官である女騎士の周りには、賞金田当ての住民達で人集りが出来ていた。

『当然、支払います。これだけ証人が居れば、情報の確度も高いでしょう。ただ、賞金は田撃者の人数で頭割りですよ?』

『は?』

絵描きはこの露天市のストリートを、端から端まで走り抜けていった。

つまり、この市場に居る全員が田撃者と言つても過言ではない。一人あたり幾らになるのか、頭で計算をしてみる。そして店主は、がっくりと肩を落とした。

『田撃者は、北街区の騎士団本部まで申請に来て下さい。後日、精算した上で、支払いには応じます。』

『ふざけんな！』

『馬車代だつて出ねえよー』

女騎士の田付きが、凶暴に光る。

その手が腰に携えた剣の柄に掛かつた。

『今の文句を言つた奴、前に出なさい。苦情は受け付けます。ただし、理屈が通らない苦情を述べる場合は、それなりの覚悟をすることです。舐めた口きくと、ぶち殺しますよ?』

群衆が静まり返り、皆が女騎士から視線を逸らす。

真つ正面で女騎士の威圧を受けることになった果実店の店主が、一番の被害者だ。

女騎士の迫力に肝が冷える。

喉元まで来ていた罵倒を、口にしなくてよかつたと心の底から安堵した。

すっかり気勢を削がれた住民達が、渋々と解散する。

恐らく賞金は、この辺りを縄張りにしているマフィアが総取りして終わりだろう。

店主達の手には、銅貨一枚落ちないに決まつている。

人ごみが散ると、女騎士は法札を地面に放り捨てた。途端に勢いよく紫色の煙が噴き上がる。

信号煙だ。

街中に分散して捜索活動をしている、指揮下の小隊を招集するのだろう。

店主が浮かない顔をして屋台に戻ると、店番をしていた女将が迎

えてくれた。

『あんた、おかえり。賞金はどうしたんだい?』

『貰えたように見えるか?』

『まあ、世の中そんな上手い話はないさ。気にするんじゃないよ』

『お前が騎士を呼んでここにきて言つたんだろうが!』

その時だ。

何かが空から、もの凄い勢いで露天市に突っ込んできた。正確には向かいの家屋の屋根を踏み抜いた何者かが、投石機から放された弾丸みたいな勢いで路上に激突した。土煙を巻き上げながら、その身体がバウンドする。

『何だあッ?』

逃げる間もない。

驚きのあまり身体を硬直させてしまった店主と女将の目前で、地面を跳ねた落下者が屋台に吹っ飛んでくる。

砕けた木片が盛大に飛び散り、落下した商品の果物が路上に転がつた。

幸い店主夫妻に怪我はなかつたが、被害は甚大だ。

何事かと体制を整えつつあつた騎士団も駆け寄つてくる。たちまち店主の屋台は、野次馬達で囲まれた。

一部の物はこれ幸いとばかりに、転がる果物を拾い集めている。

こりゃ死んだな。

誰もがそう思った。

『おい、ビースンだよこつや！ 僕達の商売、もうおしまいじゃねえか！』

『慌てるんじゃないよ、あんた！ 見ればこの人、随分と豪華な身なりをしてるじゃない。売れば屋台を建て直してもお釣りが出るぐらいの価値はありそうだよ』

『それはそうだけどよ。どう見たってこいつは貴族だぜ？ 僕らで身ぐるみ剥いじまつていいのか？』

騒ぐ店主夫妻の前で、ガラリと木材が動いた。

立ち上がったのは、落下してきた貴族の青年だ。金の縁取りがされた豪華なコートに、腰から下げた長剣。あれだけの衝撃を身に受けたはずなのに、何事もなかつたかのように服に付いた汚れを払っている。

『ひいいいいいい、蘇ったッ！』

『あんたが服を奪えなんて罰当たりなことを言つからだよ！』

『それはお前だ！』

腰を抜かす店主と野次馬達。

一方、女騎士は驚きつつも、比較的まだ冷静さを保っていた。

「竜騎士か？ 軍務省作戦局のエリート様が、どうしてこんな場所に？」

立ち上がった竜騎士の青年は、何事か顔をしかめながら独り言を呟いている。

まるで見えない相手と話しているみたいで気味が悪い。

やがて周りの状況に気付いたのだろう。

気まずそうな表情を見せると、頭を搔いた。

「や、どーも、お騒がせしてすいません」

どうやら地位的にはフローマス騎士団よりも上のようだ。
女騎士が冴えない青年を相手に敬礼をする。

「私はフローマス騎士団所属のメイヴィス少尉です。作戦局の事務官殿で間違いありませんね？ 状況を教えていただけませんか？」

「あ、急いでいるんで、ご挨拶はまた後で。本当にいません。踏み抜いたやつた屋根と壊した屋台については、後でコリン宛に請求してもらえるように伝えて下さい。俺、しばらくヘイウッド邸に滞在予定ですから」

やたらと腰の低い上級貴族の青年だった。

言いたいことだけを一方的に伝えると、青年は身体の調子を確かめるようにその場でぴょんぴょんと軽く跳ぶ。
信じられないことに、完全に無傷のようだ。

そして野次馬達に手振りで道を空けるように指示すると、人間業を超えた勢いで地面を蹴った。

『あああッ』

疾風だけを残し、青年の姿はストリートの彼方に消えてしまう。

さつきの絵描きに匹敵する脚力だった。

取り残された形の女騎士に、部下の兵士が指示を仰ぐ。

「少尉、どうします?」

「どうもしません。我々は我々の任務を続行するまでです。人員が揃い次第、次作戦を展開します」

「味方なんですか、あれ?」

「軍務省の連中ですよ。今回の件で介入していくとは聞いていましたが、早かつたですね。面倒な奴らに田を付けられました」

苦々しく吐き捨てる女騎士。

同じ帝国軍ではあるようだが、『一』の青年と女騎士達とは組織が違つらし。

店主の目から見ても、仲が良さそうには見えなかつた。

『あの~、屋台の修理代はどうに請求すれば宜しいでしょうか?』

緊迫した雰囲気の女騎士に、店主がおずおずと尋ねる。

ぎりりと睨まれて、店主が後退つた。

その背中を女将が後ろからぐいぐい押す。

『金貨六枚といったところですか。後で騎士団本部に来て下さい』

『それだと逸失利益が回収出来ないんですけど』

『分かりました、甘めに見積もつて金貨八枚としましょう。これ以上『ねると、ぶち殺しますよ?』

『ひいツ、充分です！』

目撃情報の報奨金で金貨五枚貰えるはずが、まさか屋台を潰されるとは思わなかつた。

金貨八枚はボロ屋台の補償としては良心的な金額だが、大儲けした訳でもない。

営業中断期間も考えれば、トントンぐらいだ。
気落ちした店主に、女将が慰めの声を掛けた。

『まあ、良かつたじやないか。無料で屋台を新調出来ると思えばさ』

『やうだな。商品もあらかた盗まれちまつたし、今日は店終いしかねえな。じんな田ぐらい、たまには夫婦一緒に飲みにでも行くか』

『その調子だよ。頑張るのは明日からでいいや』

カラカラと笑う女将に、店主は少し救われる。

店主夫妻からすると、今回の事件はこうして幕を閉じた。

しかし、竜騎士の青年や女騎士にとつては、まだ本編が始まつてすらいなかつた。

絵描きを追つてきたコリンは、東街区の西の端、倉庫の並ぶ河岸区画に足を踏み入れていた。

潮の香りが近い。

南街区との境目となるレスフォード川は、内陸部とフローマス湾を結ぶ重要な水運経路だ。

コリンが索敵しているのは、東側の荷揚げ区画。対岸に比べると、見るからにボロい倉庫が多い。人ひとりが隠れるにはぴったりの場所だった。

「驚いた！ 本当に驚いたよボクは！ 屋根から落ちる竜騎士なんて前代未聞だよ！ 何か、君はコメディ俳優でも目指してるのかいつ？ だとしたら自信を持つていい。何なら推薦状を書いてあげようか？ 君はそっち方面の才能だけはありそつだからね！」

さつきから脳裏には、フレデリカ先輩の罵声が響き続いていた。思わず顔をしかめるコリンだったが、通信法術をこちらから止める術はない。

何という嫌がらせだ。

「いじめないで！ 僕だってあれは格好悪かったと思つてますよ！ 穴があつたら入りたい！」

「そのまま埋まつてしまえばいいよー。」

「ひどい？」

思わず涙目になるコリン。

しかしミスをしたといつ引け田があるので、あまつ強くも言い返せない。

田標である絵描きを見失つたのは、完全にコリンの責任だった。

フレデリカ先輩からの探査波が空しく響くが、ビー・コン術式からの反応はない。

コリンがこの場に到着する数十秒前に、絵描きは先輩の感知エリアから消えてしまつていた。

測距法術の探査波から逃れる方法は二つ。

一つは術士から遠く離れて、法術のカバー・エリアから外れる」と。もう一つは探査波の届かない遮蔽物に身を隠すこと。
どちらのパターンでも、見失つたまま一定時間が経過するビーコン術式は効力を失う。

そんな状況は考えたくもなかつた。

エリア外に逃げられたとは考えられない。

見失つたこの地点の近くに隠れているはずだ。

コリンとしては時間切れ前に、絵描きを潜伏場所から引きずり出してやる必要があつた。

「そりいえ、さつき、地元騎士団の方々がいらっしゃいましたけど。連携とかしなくて、本当に良かつたんですか?」

「彼女達が絡むと、指揮権の問題が色々と面倒だからね。後でボクが調整するから心配はいらないよ。ふむ、やはりその倉庫が一番怪しそうだ」

南街区へ渡る橋や、東の街道へ続く閑所などは、既にフローマス騎士団が抑えている。

そうなると絵描きに残された選択肢は、レスフォード川から水上を逃走するか、ほどぼりが冷めるまで東街区内に隠れるか、どちらかしかない。

どのプランを採用するにしても、フレデリカ先輩のビー・コン術式を無効化させることが大前提。

有効なままでは、運良く水上に脱出しても船ごと沈められてお終いだ。

実際、先輩ならそれぐらいはやりかねない。

「コリン、ボクがそこに到着するまでも少し時間が掛かる。ビー・コン術式を解除される前に、何とか絵描きを隠れ場所からあぶり出すんだ」

「了解しました」

答えながらコリンは倉庫の分厚い木製扉に手を掛けるが、びくりともしない。

ぐるりと倉庫を一周して確認したところ、出入り口は三つあった。川側と道路側に搬入出用の大きな開き戸が二つ。さらに入人が出入りするための小さな扉が一つ。

スタッフ用の扉は錠前が壊されていたが、裏側から何かで抑えられていた。

「コリンはハンカチのような四角い布を取り出すと、搬入口へと貼り付ける。

緻密な法術回路の描かれた、指向性爆破法布だ。

川側から追い込み、道路側に絵描きが逃げ出してくれればビー・コン術式が再セットされる。

そうなればひとまず任務は成功だ。

後はフレデリカ先輩やフローマス騎士団の到着を待ちつつ、包囲

してゲームセットという作戦だった。

「コリン・イングラム、突入します！」

法布に法力を流し込んで起爆させると、ゴバーンと盛大な爆音を響かせて砕けた木片が飛び散った。

「抵抗するな！ 帝国軍作戦局だ！」

法札を構えて身を乗り出したコリンが、素早く倉庫の中に目を走らせる。

いた。

物棚に半身を隠れさせるよつこしながら、絵描きがじりじりを見ている。

手にしているのは、携帯用短法杖。

「ツ？」

パラララララララララッ！ 秒間八発の法弾がコリンに襲いかかった。

慌てて飛び退き、地面に転がるコリン。

倉庫の外壁にへばり付くように背を預けると、左胸の辺りを驚づかみにして必死に動機を抑えよつとする。

く君の存在に気付かれていたか！ 〉

「死ぬかと思った、死ぬかと思った、死ぬかと思った――――ツ

く撃ち返せ！ プレッシャーを与えて目標を倉庫から外に追い出すんだ！ そろそろボクのビーコン術式が時間切れだ！ 〉

「ちくしょう！」

突入口に顔だけを覗かせると、構えた法札を弾く。パンツと軽い音がして法弾が放たれたが、ろくに狙いもつけることが出来ない状況では当たる訳もない。

直ぐに倍以上の法弾で撃ち返され、慌てて首を引っ込めた。

「駄目です！ 火力が違すぎる！ 押し切れません！」

単発式法札に法力を込めながら、「コリンが叫んだ。コリン達が携帯する兵装は、必要最低限のレベルに抑えられる。

重武装は豪張る上に重量があるし、帝国内での運用には交戦規定上の制約が多い。

それがこうした突發的な戦闘では仇になった。

手持ちの飛び道具は、使い捨ての単発式法札が二箱だけだ。法術回路の焼き切れた法札が足下に散らばり、たちまち一箱が空になる。

残り枚数が心許ない。

せめてもの救いは、相手の武装も携帯式だということだ。

弾数や連射速度はともかく、射程と威力は単発式法札と大差ない。軍用の制式法傘でも持ち出されていたら、シャレにならないところだった。

相手に向けて何発か撃ち、すぐに次の手札に法力を注入するため身を引っ込める。

「コリン！ 投擲法札だ！」

「え？」

シャツと正確に投げ込まれた法札が、起爆する。

竜騎士法術によつて強化された瞬発力を最大限まで引き出し、全
力でコリンは跳躍した。

その背中を爆風が叩き、コリンの身体が吹き飛ばされる。

「……リン！ ……コリン、大丈夫か！ 返事をしたまえよ！」

「え？ ああ、はい。生きてます」

頭を振つてコリンが起き上がる。

自動起動した防壁法術のおかげで、制服はボロボロになつたが身
体的ダメージはそれほど深くない。

軽傷ならそれほど時間を掛けずに自然治癒する。

これも竜騎士を構成する法術パッケージの一機能だつた。

「うん。君の身体をスキャンしたが、致命的な問題はなさそうだね。
良かつた。君に何かあれば、ボクは君のお父上に顔向け出来なくなる
からね。だがしかし、悪いニュースもある」

「何ですか？ 想像は付いてますけど、一応教えて下さい」

「ボクのビークン術式が消滅した。方針変更だよ。ボクらがその場
に到着するまで、何としても絵描きをそこに足止めするんだ」

「あと何分ぐらい保たせれば良いですか？ 正直、もう単発式法札
の残札がありません」

「五分。いや、三分でいい」

「了解です。それぐらいなら何とか」

そつと突入口から覗くと、まさに絵描きが道路側の扉から逃げようとしているところだった。

ジークン術式が解除された以上、この倉庫に留まっている理由は絵描きにとつて何一つない。

コリンからの攻撃が止んだ隙に、再び逃走を図るつもりだらう。そうはさせない。

すらりと長剣を抜いたコリンは、絵描きの注意がこちらに向いていないことを確認して、お返しとばかりに投擲法札を投げつけた。

爆音。

物棚が崩れ、土煙が倉庫内を覆う。

既にコリンのことは排除できたと思い込んでいたのだろう。不意を突かれた絵描きが、携帯用短法傘を見当違いの方向へ乱射する。

巻き上がった粉塵にまぎれて一気に距離を詰めたコリンが、倉庫の壁を蹴つて跳躍した。

絵描きが驚愕した顔でコリンを見上げるが、遅すぎた。

コリンは確信した。

この絵描き、兵装はともかく戦闘経験は素人だ。

殺してしまわないように気を付けながらも、腕の一本ぐらいはもうつづりだつた。

コリンが一気に長剣を振り下ろす。

「なあツ？」

竜騎士法術の斬撃は、板金鎧すら易々と切り裂く。その一撃を、絵描きは素手で受け止めていた。剣先を掴まれたコリンの身体が、一瞬だけ宙に止まる。時まで止まつたように感じたのは、コリンの錯覚。絵描きが乱暴に腕を振り、凄まじい速度でコリンの身体が素っ飛んだ。

倉庫の壁に叩き付けられたコリンが、がはっと血を吐いた。

視界に亀裂が走り、赤く滲む。
有り得なかつた。

理解が出来ない。

コリンの戦闘能力は竜騎士法術で強化されているのに、この差は一体何だ。

防壁法術でダメージの大半を相殺したはずにも関わらず、コリンは身動き一つ取れなかつた。

竜騎士法術が自動的に生命維持モードへ移行。法力リソースの大半が、傷の修復に回される。重傷だ。

この様子では起き上がるまでかなりの時間を要する。

もちろん相手は、悠長に待つてはくれない。止めを刺すつもりだろうか。

絵描きが注意深くこちらの様子を伺つた。やばい。

死ぬ。

コリンは直感でそう悟つた。

さつきまでとは、絵描きの雰囲気が全く違つ。人間を超えた存在が、そこには居た。

くその通り。そいつこそが法術の「コピー」元にしてオリジナル。異端者と呼ばれる存在だよ。コリン、よく耐えた。危ないから頭を下げているといい>

フレデリカ先輩の声はそれだけ伝えると、それっきりぱつりと通信法術ごと切れた。

ぞくぞくと悪寒が背中を駆け上がる。

これは絵描きの威圧感ではない。

もつと身近で慣れ親しんできた恐怖だ。

「うわあああああああ——ツ！」

ほとんど崩れるよつとして、コリンは頭を抱えて床に這い蹲つた。その直後。

コリンの頭のすぐ上。

倉庫の壁が豪快に吹き飛んだ。

圧倒的な破壊力が、壁や物棚ごと何もかもを押し流す。熱量がコリンの髪の毛をチリチリと灼いた。

本来は城門を破壊する用途で開発された、攻城級法術。

こんなものを単身で扱える術士など、帝国広しといつても数人しか存在しない。

全ての衝撃が去った後、倉庫の外壁は大きく崩れ、穴が二つ空いていた。

中の様子は廃墟そのもの。

倉庫主には気の毒なことだが、在庫の品は全滅だろつ。

「殺す気ですか——ツ！」

瓦礫に埋もれていたコリンが、起き上がりながら叫んだ。

崩れた壁を挟んでコリンの真後ろ、倉庫の外に仁王立ちをしたフレデリカが「ふむ」と頷いた。

「逃げられたか。この攻城級法術、起動時間に未だ改善の余地があるな」

「本気で死ぬかと思いました！ それも戦死じゃなくて、同士討ちで！ 異端者よりあんたの方がよっぽど危険だよ…」

「せつかく助けてあげたのに、失敬だね君は。そろそろ動けるだろ？ セツカと立ちたまえ。やれやれ、また追跡劇の再開だよ」

「外傷は回復しましたが、法力はそろそろ底尽きそ�です」

「法力のスタミナだけが君の取り柄だらう？ 並の人間ならとっくに枯れてる。何世代も計画的に濃縮されてきた、貴族の血つてやつだろうね。生まれながらの才能をくれたご先祖様に感謝することだ」

フレデリカが手を伸ばし、コリンの身体を瓦礫の中から引き摺り起こした。

見渡すとフレデリカの周りには、フローマス騎士団の兵士達が慌ただしく動き回っている。

「目標の絵描きは、船の奪取は諦めてまた東街区に逃げ込んだようだね。ま、後は袋の鼠だよ。掃討戦はボクらとフローマス騎士団の共同作戦と行こうか」

休ませてくれる間は、まだ貰えそうになかった。

絵描きが逃げ込んだのは、東街区でも建物が密集している区画だつた。

フローマス騎士団の二個分隊に、追跡の任務が与えられた。残りの分隊は、包囲網形成に回っている。

コリンは追跡班への配置だ。

異端者相手に生身の兵士では犠牲が増えるばかり。

竜騎士であるコリンと、術士のフレデリカはそれぞれ別分隊のサポートに付いた。

つまりコリンの役目は、異端者と会敵して第一撃を食らうための盾役だ。

役割が嫌すぎる。

裏路地は見通しが悪く、日が差し込まずに薄暗い。

人間が一人擦れ違うぐらいがやつとという、細い道だ。

盾役として隊列の先頭を行くコリンは、感覚を研ぎ澄ませながら慎重に足を進めた。

角を曲がる度に、どつと緊張してしまつ。

正直なところ、もう一度とあの絵描きとは戦いたくなかった。

あれに勝てる自分がイメージ出来ない。

出来ることなら、自分以外の追跡班か、包囲班に当たつてほしいところだった。

幾つかの角を曲がつたところで、ガタツと何かの倒れる音が路地に響いた。

逃げる足音。

地元の善良な住人か、野良犬辺りが立てた物音だと信じたい。信じたいが嫌な予感しかしなかった。

分隊の兵士達と無言のまま顔を合ひ。バツと次の角へ身を乗り出すと、ちらりと絵描きの背中が見えた。

「ちくしょうー、うちのチームが当たりかよー、そんな予感はしてたんだー！」

「どうやらボクらの方はハズレらしい。強運だね、コリン。」うちの隊もそちらに向かうよ。挟み撃ちにしよう♪

もはや脇道」とに探索する必要もない。

足音の方向へと、待ち伏せだけに気を付けながら速度を上げた。こちらの物音に、相手も気付いたらしい。絵描きの足音が急に駆け足になる。

「感づかれたー！」

「目標に会敵！ 友軍へ連絡しろー！」

隣を走る兵士が笛を鳴らした。

別の兵士が投げ捨てた法札からは、色付きの狼煙が勢いよく上空へ噴き上がる。

この状況になつた以上、遠慮はいらない。

追うコリン達も全速力だ。

そりは言つても道が狭い上に、ゴミなどが散らかつており足場は最悪。

お互ひ大通りを全力疾走していた時みたいな速度は出ない。

路地の真ん中に堂々と置かれた得体の知れない木箱を乗り越えた時、先の角からどちらと妙な音が響いた。

ぴたりと足を止め、コリンが分隊の兵士達と目線を交わす。

そして皆が何の音か判断つかないことを示すよつて、首を横に振つた。

迷つていても時間をロスするだけだ。

罠だとしても飛び込むしかない。

コリンが長剣を構え直し、そのフォローをするように兵士達が軍用の連弾式法傘を構えた。

中には一人懸かりで操る分隊支援用の重法傘まで混じつてゐる。絵描きの所有する携帯式短法傘が、子供のおもちゃに思えるほど

の重武装。

さすが軍隊。

前衛のコリンとしても、かなり心強かつた。

完全な戦闘態勢で身構えたコリン達の目前に、先の角からオレンジが一つ、ころころと転がり込んできた。

「？」

微かに漂う柑橘類と鉄の香り。

ますます角の向こうで何が起つてゐるのか理解できない。

いち早く血相を変えたのは、コリンに同行する兵士達だった。

「事務官殿、こいつは血と臓物の匂いです！ くそ！ 誰が犠牲に

つ？」

「他班が先に会敵したか？ 馬鹿な！」

「包围班も有り得ない！ 合流ポイントはまだ先のはずだ！」

例えそうだとしても、交戦すら一切しないのは不自然すぎる。

もしかしたらまた居合せた地元住民が犠牲になつたのかも
しない。

「もちろんボクらの班じゃないよ。そちらに到着するには、まだ少
し時間が掛かりそうだ」

何れにしても、一刻の躊躇も許されない状況だ。
悠長にフレデリカ先輩達の到着を待つ余裕はない。
意を決して角に飛び込む。

「動くな！ こちらは帝国軍作戦局及び、フローマス騎士団だ！」

むせ返るような死臭と、一面に広がる血の海の中。
小柄なメイドがぽつりと立ち廻っていた。

歳は十歳前後だろうか。

紅血に塗れた陶器のようないい肌。

空虚に澄んだ蒼い瞳は、大きく見開かれたまま固まっている。
メイドの立つ位置は路地裏でも開けた場所にあるらしく、演劇の
スポットライトみたいに日の光が射し込んで、銀髪の三つ編みがき
らきらと輝いた。

「天使……？」

兵士の一人が、魂を抜かれたような表情で呟く。
心奪われる光景に、コリンも思わず同意しかけてしまった。
それほどメイドの美しさは圧倒的で、現実離れしていた。
しかしそれは、触れれば消えてしまいそうに優げな美しさでもあ
つた。

やがてこちらに気付いたのだろう。

メイドが首を傾げ、小さな唇を僅かに開く。

「あは、コリン・イングラム様なのテスね？ 港湾都市フローマスへ、よひこせなのテスよ！」

人形に命が吹き込まれたようだ。

メイドがにつこり微笑んだ。

白い肌に生氣が戻り、ほんのり桃色に色付く。はにかむような笑顔が瑞々しい。

戦意が抜け、コリンの剣先もゆっくりと下がる。

メイドの可愛らしい微笑みだけが、周りの情景から著しく乖離している。

非日常に、無理に日常を押し込んだような違和感。

コリンにはメイドが、現実を見つめていないよう感じた。

平和を享受しながら、繁栄を続けてきた港湾都市フローマス。

それがこの一画だけ、まるで戦場を切り出してきたような凄惨な

情景。

数十メートルも離れた通りでは、何も知らない人々が今も日常生活を営んでいる。

その事実が信じられない。

メイドの抱えた袋からこぼれ落ちたオレンジが、血溜まりに転がつていった。

「コーン、ぼーっと突つ立てないで周囲を索敵！ いや、今のは無しだ。撤回するよ。他所様の隊から、戦死者を出す訳にもいかないからね！」

フレデリカ先輩からの声が、すぐ遠くに聞こえる。

我に返った兵士の一人が、慌てて首元にぶら下げていた笛を吹いた。

ピイ、ピイ——ツという甲高い音が路地裏に響く。

作戦終了の合図だ。

同時に打ち上げられた照明法弾が、強烈な青白い光を放ちながら宙を漂つた。

止まっていた時が動き出したよし、慌ただしく兵士達が各自の仕事に取り掛かる。

飛び散る血とへしゃげた肉片。

白く覗くのは碎けた骨。

どれほど力が作用したのか分からないが、壁にへばり付いていたのは、かつて絵描きだったモノの残骸。

既に原型は留めていない。

熟れた果実を思い切り壁に投げつければ、このよつた凄惨な姿にもなるのだろうか。

「君、気をしつかり持つんだ！」

コリンは自分の派手なコートを外すと、棒立ちになつたままのメイドの細い肩へ優しく掛けてやつた。

安心したよし、ふらりと力の抜けたメイドを慌てて抱きかかえる。

いつしてコリンは、路地裏の戦場でシャルロと会合つた。

帝国と王国連合の戦争が始まって、既に八十年近くが経過している。

小休止を挟む度に、参戦国の顔触れや敵味方は目まぐるしく入れ替わり、開戦時の大義名分などはどこかへと消えてしまった。

根底にあるのは、帝国に代表される海洋勢力と、それに抵抗する大陸勢力との経済戦争だ。

一進一退の争いを続けてきた二者だったが、近年のパラーバランスは帝国優勢へと傾きつつある。

勢いに乗る帝国は、数十年振りに王国連合の盟主国領内へと軍を侵攻させた。

城塞都市ローアン。

盟主国の王都目前まで迫った帝国軍ではあったが、一つの地方都市がその進撃を足止めした。

当初三ヶ月で陥落すると見込まれた城塞都市は、予想に反して一年以上の強硬な抵抗を見せる。

その間、帝国軍の司令官が交代する」と二回。全て王国側の仕組んだ暗殺作戦が原因だった。

現在の師団司令官代行は四人目となる。

彼の名は、ウイリアム・ヘイウッド。

フローマス伯ヘイウッド家の長子としてヒュー・ヒースを進んできた、折り紙付きの帝国軍人だ。

階級は少佐。

二十九歳。

本来であれば少将級のポストである師団司令官としては、異例の若さだった。

「いい夜だ。 そうは思わんか、 軍曹」

「全くです、少佐。 月明かりどころか、星ひとつ見えない。 例え太陽が出ていたとしても、この吹雪なら一百メートル先の灯りすら見えんでしょうな」

近年稀に見る、記録的な猛吹雪。

肌を刺す冷気と雪の飛礫が、若き司令官とその副官のフードを激しく叩く。

騎馬がぶると唸り声を上げ、白い息を荒々しく吐いた。

兵士達が首を竦めて極寒に耐える中、馬上で堂々と背筋を伸ばしたウイルの表情はどこまでも晴れ晴れとしている。

ウイルが直接率いるのは、実父であるフローマス伯爵から預かってきた歩兵連隊二千名。

さらに他家が所有する二個歩兵連隊と法兵連隊及び竜騎兵連隊が、吹雪に晒されながらも所定位置で待機中。

予備兵力を含めて合計一万名近い帝国軍一個師団が、今やウイルの指揮下にあつた。

対する城塞都市ローアンの守備兵力は僅か二千強。

残りは素人同然の市民兵ばかり。

しかも長期の包囲戦により、精神的にも肉体的にも彼らは極限まで追い込まれていた。

兵力差は圧倒的。

それでもなお、ウイルは非情なまでに一切の手心を加えない。

伝令兵と何事か言葉を交わしていた軍曹が、ウィルへ報告する。

「少佐、内通者からの合図を確認。城門は予定通り、我らの手に落ちました」

「上出来だ、軍曹。プランAからの変更はなし。この戦には随分と投資したからな。そろそろ回収させてもいいとこよ」

「了解です、少佐」

オーケストラ指揮者のような優雅な仕種で、ウィルが腕を頭上へ掲げた。

一瞬、吹雪が収まる。

それはただの偶然。

しかしその光景は、ウィルの手刀が雪雲を切り裂いたかのようだつた。

「武運を祈る！ 全ては、女王陛下のために！」

ウィルの手を振り下ろされると同時に、信号法弾が放たれた。稜線に伏せていた兵士達が、迷彩用の白いフードを脱ぎ捨て一斉に立ち上がる。

「女王陛下万歳ッ！」

「女王陛下万歳ッ！」

抜剣する刃滑りの音と鬨の声が、一万名の軍勢へ波紋のように広がっていく。

城塞都市ローアン側からも照明法術が次々と打ち上げられ、強烈

な青白い光が帝国軍の全容を照らし出した。

警鐘が鳴り響き、慌てて反撃に転じるローアン守備軍。

しかしその反応はあまりに鈍い。

ローアン守備軍の組織的な斉射が始まる頃には、既に帝国軍の先鋒は城壁まで二百メートルという距離まで接近していた。

帝国竜騎士の馬上槍から放たれた法撃や攻城級法術が、幾重にも張り巡らされた城塞都市ローアンの防壁法術に衝突。

オーロラのような輝きを放ちながら、防壁法術が砕けていく。

飛び交う弓矢と攻性法術。

幾人かの帝国兵士が雪上に力尽きていくが、帝国軍は意に介さない。

脱落者を踏みつけて進むような勢いで攻め続けた。

そして、城門が内側から開かれる。

後は文字通り圧倒的な展開だった。

城塞都市に広がる戦火が、天を覆う雪雲を赤く染め上げる。

交戦開始から、わずか十数分しか経過していなかつた。

ローアン攻城戦から五年。

旧王国連合領から海峡を挟んだ向かい側、帝国本島の南端に位置する港湾都市フローマスでは、連続騎士襲撃事件で街中が騒然となっていた。

交通規制を実施してまで強行された重要参考人の捕縛作戦は、完全に失敗。

参考人である絵描き自身が殺害されるという形で幕を閉じた。その舞台となつた東街区の路地裏は、野次馬達が集まつてちょっとしたお祭り騒ぎだ。

現場検証中の騎士団が、押し寄せる市民達を懸命に追い払つている。

「はー、それではコリン様も、あの襲撃事件を解決するためにフローマスまでいらっしゃったのデスねー」

「そつなんだ。俺達は軍務省作戦局の所属でね。地方騎士団だけでは手に負えない難事件の、火消し役を務めてる。特に特務四課では、法術に関わる事件や異端者対策を扱つてているんだ」

絵描きの殺害現場からほど近いパブ、王国の夕暮れ亭。湯を借りていた一人のメイドが、タオルで頭を拭きながら作戦局の青年から事情聴取を受けていた。

聞き取り役になつてている青年の名はコリン。

栗色の髪をした、いかにも頼りなさそうな若者だった。

これでもスリス公爵家の、次々期後継者と目されている。

現在の軍務省所属といつ地位は、箔を付けるための実地研修みたいなものだった。

一方、絵描きの殺害現場に届合わせたメイドは、シャルロとタガ乗つた。

まだ十歳前後に見えるぐらいの、幼さを残す子供使用人だ。本来なら三つ編みにされているはずの銀髪を、今は解いていた。

「はふー、よつやくひと息ついたのデスよー」

タオルから顔を離すと、シャルロがまつたりとした声を伸ばす。無防備すぎるその表情に、コリンは息を詰まらせた。保護欲を掻き立てる、尋常でない可愛いさだ。

その上、湯上がりのせいだろうか。

シャルロのほどけた銀髪からは、とてもいい匂いがしていた。思わず深呼吸をしてしまうコリン。

シャルロが、きょとんとした無垢な表情を向ける。

「あの、コリン様？ どうかされたデスか？」

「いやいやいやー、違うー、別に見惚れてたとか、そーいう訳じゃないからー！」

慌てて両手を振つて誤魔化すコリン。

いけない。

初対面同然なのに、これでは危ないお兄さんだ。

シャルロに無用な警戒心を持たれるのは非常に宜しくない。

くちゅっと待ちたまえ、コリン。君は何か、決定的な勘違いを犯していいかい？

「は？ 何ですか先輩。急に口を挟んでこないで下さい」

脳裏に響くのは、離れた現場で検証作業をしているフレーテリカ先輩の声だ。

通信法術は遠隔地からの意思疎通を可能にする。

欠点は、コリンの側からは通話を切断することも出来ないということだ。

通話権限は、一方的に先輩だけが有している。

「ボクも君の視覚を通して見ているけど、確かにそのシャルロちゃんは可愛いね。なかなかお目に掛かれないレベルだよ。でもね、彼、男の子だよ？」

「はつはつはつ。嫌だなあ、先輩。こんなに可愛い子が、男の子な訳じゃないじゃないですか」

「いえ、わたし男の子デスよ？」

「え？」

お風呂上がりの色気を醸すプラチナブロンド。

透き通る蒼色の大きな瞳。

小さく整つた鼻と口。

白い肌はうつすらピンクに色付いて、発育途上な身体は絶妙なラインを描いている。

「だからどう見たって、美少女だ。

こんな美少女、コリンの人生で見たこともない。

「あは、初対面だとたまに間違えられちゃうデスけどね。でも、本当に男の子デスから。ほら、触つてみますか？」

シャルロがコリンの手を取つて、自分の胸元に当てる。ぺたんとした真つ平らな胸。

ぺたんとした真っ平らな胸。

しかしコロンの年頃なら、あまり証明になつていかない気がする。

「ほら、お分かりになつたデスよね」

「嘘だ……シーッ。」

コリンが絶叫がパブに響いた。

見るに見かねたシャルロの顔見知りだというウエイトレスが、コ

レシピのデータベースに登録する

「ちょっとリュシーさん、止めて下さいなのテス！ ほら、騎士様がびっくりして固まっているのテスよ！」

「シャルロちゃんの性別でびっくりする人なんて、いつものことじやない。事実を受け入れられない男って、格好悪いわよねー」

「そのウエイトレスが言う通りだよ。ほら、いつまでもショックを受けていいで、せつと働きたまえ」

何といふことだらうか。

「コリンの中で価値観がガラガラと音を立てて崩れていく。

シャルロが男の子だなんて、おかしすぎる。

神様が何か決定的なところを間違えてしまったに違いない。

何だかもう事件のことなんて、コロンの中ではどうでも良くなつてきた。

そんなことよりシャルロがやんだ。

「事務官殿、何なら聞き取りは私が行いましょうか？」

同席するフローマス騎士団の兵士が、控えめに尋ねる。

彼はシャルロの性別を知っていたらしく、それほど衝撃を受けていない。

やばい。

軽蔑の眼差しがコリンに集中する。

歳は若くても階級が上の人間として、じいは毅然とした態度を取る必要があった。

「いえ、取り乱しました。もう大丈夫です」

過去形じゃないけどね！ 絶賛、今も取り乱し中だけどね！ 等

とこう心の声は、微塵も表に出す訳にはいかない。

平静を取り繕つて、聞き取りを再開する。

シャルロの職場はヘイウッド邸だといふことは、既に聞いた。

雇用主はフローマス伯爵。

港湾都市フローマスの領主様だ。

シャルロ自身の身元確認は、省略しても構わなさうだった。

彼の仕事は、領主から届いた私的な書簡の配達だといつ。美少年をメッセンジャーに採用するのは、貴族達には良く見られることだ。

「「つのメッセンジャーはこんなに可愛いんだぞー」と、対外的にアピールする目的もある。

いやだから、可愛すぎだつてと内心でシッ ハリを入れざるを得ない。

初対面のコリンを、いきなり名前で呼んできたことも納得だ。何しろヘイウッド邸には、しばらく滞在させてもらう予定でいる。そこで働くシャルロが、コリンのことを知っていたのは不思議でもない。

今日も午後から、シャルロは各地の名士達へ書簡を配達していたという。

そして配達も終わり、いつものように馴染みである東街区の露天市に訪れた。

果実店ではオレンジを購入。

その後、乗合馬車に乗るために、近道である路地裏を歩いていたところ、事件に遭遇という流れだった。

「コリンや騎士団が繰り広げていた、追走劇には気付いていたらしい。

「ただ、あんまり気にしていなかったのデスよ。ほら、この街では強盗や殺人なんて日常茶飯事デスから。自警団に追われる犯人さんなんて珍しくもないのデス」

「そんな物騒なところ、ひとりで歩いちや駄目じゃないか！ 誘拐されたらどうするの！ いやむしろ、俺なら誘拐してお持ち帰りするね！」

「コリンが今さらながら激高して犯罪宣言をする。

改めて考えてみればとんでもない話しだ。

大人にとつても危険な貧民街。

いつ首締め強盗や人攫いに遭つても不思議ではない。

シャルロのような子供のひとり歩きなど、格好の餌食になつてしまふ。

ところがシャルロは、にっこり笑うとコリンの注意を軽くスルーしてみせた。

「あは。ご心配ありがとなのデス。でも、わたしにとつては第一の故郷みたいなものデスから。この移民街は、同胞には優しい街なのデスよ」

「それにしたつて、無防備すぎるよ！ 屋敷の人達は、何も言わないの？」

「あ、でも、帝国の方にはちょっとびり危険かもしれないデスね。コリン様がこの街を歩く時には、気を付けてほしいのデス。武装しないまま、ひとり歩きしちゃ駄目なのデスよ？」

「逆に心配されたツ？」

そこから先の話は、コリンの記憶とも一部が重複する。残念ながらシャルロも、犯人の顔は見ていないらしい。

シャルロの歩いていた路地に逃げ込んだ絵描きは、そこで待ち構えていた何者かに出会い頭で殺害された。

その瞬間を、シャルロは目撃してないそうだ。

「ローブみたいのを被つた人が、逃げていく背中は見た記憶があるのデス。確信は持てないのデスけど、女性のような肩幅だったのデスよ」

「コリン達がやつてきたのは、その後だつたといつ。ちなみにコリンは、そのような人物は見ていない。現場に足跡も残つていなかつた。

ただ、相手は異端者を一撃で葬るような化け物だ。常識で考えて意味があるとは思えなかつた。

直ぐに周辺を索敵しなかつたのが悔やまれる。中断したのは確か、フレデリカ先輩の指示だ。

客観的に見て、その指示は正しかつた。

上位の異端者や聖絶指定種が相手だつた場合には、当時のコリン達の装備では逆に全滅していた危険性が捨てきれないからだ。犯人と邂逅しなくて救われたのは、もしかしたらコリン達の側だつたのかもしれない。

シャルロも無事で良かつた。

「そうそう、もう一つ覚えているのデス」

「うん、どんな些細なことでもいいから教えてくれると助かるよ

「『助けて』
と」

「え？ もう一回お願ひ」

「帝国語に訳すと、助けてといつ意味なのデスよ。とつても切実な声色だつたから、耳の残つてゐるのデス。ただ、もしかしたら聞き間違ひなのかもしれないデスけど」

「犯人は、絵描きの身内だつたのか……？」

そう考えるのが自然だ。

通りすがりの子供でしかないシャルロに助けを求めるとは思えない。

異端者の中には、通信法術と同系統の能力を使う者達も存在すると聞く。

絵描きは現場まで誘導されて、その上で犯人に口封じられた可能性にはかなり真実味がある。

「コリン、シャルロちゃんをこっちに連れてきてもういいとは出来るかい？ もちろん無理そなうならまた後日でいいよ。君の判断に任せる」

再びフレデリカ先輩からの通信法術。

何しろシャルロは、人が死ぬところを目前で見たばかり。

トラウマになっていてもおかしくない。

しかしあの場でかなり弱っているように見えたシャルロも、今はすっかり立ち直っている様子だ。

王国出身のシャルロにとって、戦場は見慣れた光景だったのかもしれない。

これだけ元気なら、シャルロを現場に連れて行つても問題なさうだった。

「あ、はい。一応は本人に聞いてみます」

「あは、わたしなら全然へっちゃらなのデスよ。記憶が薄れないうちに、早く済ませちゃうのデス。ただ、あんまり帰りが遅くなると、屋敷のみんなを心配させちゃうぞうデスけど」

「それなら俺達の馬車に相乗りしていけばいいよ。どうせ行き先は

「へイウッド邸だろ？ 乗合馬車よりは早いはずだ」

「わあ、それは大助かりなのデスよ！ ありがとなのデス！」

無邪気に喜ぶシャルロは、やはり底なしに可愛かった。

これで男の子だなんて、やはり信じられない。

労働者階級の中では、領主の屋敷に雇われているシャルロは間違
いなく勝ち組に属する。

最底辺に近い貧民街の住人から、妬みの対象になつていながら
不思議だった。

そんな疑問も、シャルロの笑顔を前にすれば一発で氷解してしま
う。

移民街のアイドル的存在な男の娘。

ファンクラブがあるのなら、コリンも是非入会したいところだつ
た。

本当にそんなクラブが存在し、本当に入会してしまったのはもう
少し後日の話だ。

絵描きの殺害された現場には、未だ生々しい痕跡が残されたままだった。

血に塗れた壁の前。

二人の女性が並んで立っている。

周りでは兵士達が、地面に這いつぶばつて遺留品を捜していた。

「最初の一人は、通常の殺人事件として処理されました。軍務省にも、定型的な報告しかしていません」

連続騎士襲撃事件の概要を説明しているのは、地元フローマス騎士団の女騎士。

名はメイヴィスという。

髪の毛を短く刈り上げ、褐色に灼けた肌を持つ女性だ。

二十代半ばにして一個小隊を率いる士官であり、階級は少尉。元は偵察飛行隊の所属だった。

おかげで同世代でも軍歴は長く、昇進のスピードも頭ひとつ早い方だった。

隣りに並んでいる軍務省の女性事務官は、フレデリカ・ショーティ。

小柄な上に童顔のため、外見だけだと子供にしか見えない。

階級は確か、上級二等官だったはず。

武官なら中佐クラスに相当する。

少尉のメイヴィスからすると、実感が沸かないほどの階級差。こうして直に話をしていることが信じられない。

これが上級貴族の特権というやつか。

若干の妬みを自覚しつつも、表面上は上官への礼儀を保ちながらメイヴィスは説明を続けた。

本来なら軍務省の相手など、大尉辺りに対応してほしい。

しかしこの場に居る士官は、メイヴィスだけなのだから仕方なかった。

「私達が事態の深刻さを認識したのは、一人目の犠牲者が出た後です。初動の遅れについては、返す言葉もありません」

「別にボクは、君達を責めるために来た訳じゃないからね。そんなに緊張しないでくれたまえ。それに帝国騎士が殺されるなんて、そこまでレアなニュースでもない。当時の対応としては適切だったと思うよ」

確かに帝国騎士の絡んだ殺人事件なら、これまで稀に発生していた。

しかし、連續殺人となると話は全く違つてくる。

特に問題視されたのは、二人目の犠牲者が不意討ちではなかつたこと。

正面から交戦したと思われる痕跡が残されていた。

「三人目と四人目が行方不明になつてから先は、既にレポートを上げている通りです。ご存知の通りフローマスは、法術関連の規制が緩く、聖絶指定主の保護特区にもなっています。残念ながら、治安状況は良くありません。それでも今回のようになりここまで堂々と我々が狙われた事例は初めてです」

四人目の犠牲が出るに至り、フローマス騎士団の団長であるウィリアム・ヘイウッドは事態の公表を決断した。

領内の恥を外部へ晒すことになり、その決断には賛否が分かれる

ところだ。

フローマス騎士団からの報告に、帝国軍上層部は衝撃を受けた。三人目と四人目の犠牲者は、ツーマンセルで行動していた竜騎士ペア。

つまり、帝国陸軍の主力である竜騎兵法術が、敗北したことを意味する。

これは地方騎士団だけの問題に留まらない。

直ぐに本件の扱いは、帝国軍全体を巻き込んだ重大懸案事項へと格上げされた。

軍務省作戦局の介入は、遅かれ早かれ避けることは出来なかつただろう。

「ウイルは火消しに戻つてこないのかい？ ボクが思うに、この件は彼の詰めの甘さが原因だよ」

フレデリカはウイリアム騎士団長とも旧知であるらしい。信じられないことに、愛称を呼び捨てだった。

それだけでもメイヴィスとの絶望的な身分差を痛感せられる。

ウイリアム本人は現在、港湾都市フローマスを留守にしていた。ローラン政務長官として長く海外に駐在しており、帰国は難しい。フローマス連隊の主力三個大隊も、ローランに外征したままだ。つまり連続騎士襲撃事件は、ウイルの留守を狙つて引き起こされたという見方も出来る。

「団長は本件について、フローマス駐屯大隊だけで対処可能と見通しています。現在までに確認された犠牲者は八名。この絵描きを含めても九名に過ぎません。ローランで日々増え続けている戦死者数

を鑑みれば、外征中のリソースを本国に呼び戻す余裕はないと判断しました」

「ふん。確かに数字だけ見ると、その答えで正しいけどね。ま、彼らしい考え方だと言つておこつか」

小馬鹿にしたような物言いで、メイヴィスのこめかみがピクリと反応する。

ここで怒つては駄目だ。

自制しろ。

軍組織において階級は絶対。

小娘みたいな童顔をしていても、フレデリカは階級だけならワイアム団長よりもさらに格上だ。

唐突にフレデリカが、目前の壁へと手を伸ばした。

既に絵描きの遺体そのものは回収されているが、それでも血や肉片はこびりついたまま洗い流されではない。

半乾きに凝固した血液を指先で拭うと、それをフレデリカは自らの口で舐め取つてみせた。

もじもじ咀嚼すると、そのまま路上に吐き捨てる。

隣のメイヴィスは、驚きのあまり目を見開いたまま硬直していた。

メイヴィスだって帝国騎士の一員だ。

前線経験もあり、死体には慣れている。

そのメイヴィスから見ても、フレデリカの行動は常軌を逸していた。

ナフキンで口元をぬぐつフレデリカは、あくまで平然としたものだ。

「ふむ。彼は異端の力に目覚めてから、まだ日が浅いね。交戦時に

手応えがなかつた訳だよ

異端者に対抗することを主任務とする特務四課は、異端者並の化け物揃いという噂は本当だったのか。

思い返してみれば、河岸の倉庫区画で放たれた攻城級法術だつて通常の運用では考えられない。

フレデリカという事務官は、何もかもが常識外すぎた。

マイヴィスは生睡を飲み込むと、質問を重ねる。
声が震えていか心配だった。

「覚醒したきつかけは分かりますか？ 取替子？ それとも聖絶指定種との接触でしょうか？」

「接触タイプだ。君達の期待通りの答えだろ？」

見透かしたような目付きで、フレデリカがにやりと笑う。
そして壁の血痕を親指で示しながら宣言した。

「間違いない。この絵描きを下僕にしたのは、ローアンの魔女だよ

「ツ！」

図星だ。

まさにそのキーワードこそが、フローマス騎士団が追い求めていた答えただった。

ローアンの魔女。

ローアン攻城戦において、立て続けに帝国側の司令官を暗殺した聖絶指定種の通称だ。

戦後に姿を消し、今まで消息は掴めていなかつた。

ローランの魔女が、フローラス騎士団を襲撃することは正当な理由がある。

故国を滅ぼされた復讐。
大義として不足はない。
上等だ。

受けて立つてやる。

フローラス騎士団にとつても、ローランの魔女には多くの戦友を討たれてきた。

復讐が復讐を呼び、片方が滅びるまで永遠に終わることのない争いの輪廻。

何と素晴らしいことだらうか。

「やけに嬉しそうだね？」

「任務に私情は挟みません

こみ上げる歓喜を抑え込みながら、しれっとメイヴィスは答えた。
しかしそんなメイヴィスの内心も、隣の事務官を見た瞬間に凍り付く。

フレデリカ事務官の童顔に浮かんでいたのは、戦慄を覚えるほどの狂喜。

本能的な恐怖に、メイヴィスの背筋がぞくりと震える。

メイヴィスは理解した。

この事務官は、メイヴィス達と同類だ。
魂が遠い戦場に縛られている。

くく、とフレデリカが喉の奥で笑つた。

「皮肉なものだ。表舞台から退場したはずのボクに、再び機会が巡ってくるとはね。ずっとローアンの地で彼女を追っていたウイルは、どんな顔をするだろ？」「…」

息苦しいほどに重い空気を振り払ったのは、場違いに平和ボケした掛け声だった。

「あ、先輩～。シャルロちゃん連れてきましたよ～」

間の抜けた印象の青年がこちらに手を振っている。
事前に通知されていた資料には確かに、フレデリカ上級一等官の補佐要員としか記載されていなかった。

宿泊先となるヘイウッド邸なら、貴族名鑑などで詳しい情報を下調べしているだろうが、メイヴィスにとつてはさほど興味もない。
作戦局所属というだけで、どこか上級貴族の「子息様」だろうと予想は付く。

「それでは私は、これで失礼します。何かあればお声掛け下さい」

メイヴィスは敬礼をすると、やつてきた竜騎士の青年と入れ違いにフレデリカの隣りから離れた。

青年が連れてきたのは、事件の目撃者でもあるヘイウッド邸のメイドだ。

早速フレデリカは、メイドに聞き込みを始めていた。

現場から離れたメイヴィスに、歩み寄った伍長が押し殺したような小声で囁いた。

「少尉、あいつら一体何者っすか？」

フレデリカが上級貴族だということは、一目で分かつたのだろう。そのため彼女から、メイヴィスが離れる頃合いを見計らっていたらしい。

下級貴族のメイヴィスでさえ、物怖じしてしまう身分差だ。平民身分である下士官や兵士達が、フレデリカを避けるのは当然と言えた。

「彼女はフレデリカ・ショーテー。名高きルーンベリー公ショーテー家のご令嬢にして、軍務省作戦局から派遣されてきた特務四課の事務官です」

歩きながらメイヴィスが応じる。

帝国軍の内部には、大きく分けて二つの組織が存在する。まずは作戦実行部隊。

実際に戦場に投入される際には、諸侯が所有する様々な兵科の連隊を組み合わせて、師団や方面軍を構成することになる。

戦場で血を流すのが、彼らの仕事だ。

メイヴィス達はこちらに属する。

もう一つが軍務省。

彼らが戦場に立つことは稀だ。

封臣会議で示された方針に基づいて、情報を収集し、具体的な作戦を立案する。

予算と人事権を握っているため、実質的には作戦実行部隊よりも上位組織と言えた。

フレデリカ達が所属する作戦局特務本部は、正規軍では都合の悪い不正規戦を専門とする組織だ。

メイヴィス達があくまでフローマス伯爵に仕える立場なのに対し

て、フレデリカ達は女王陛下直属とも表現出来る。

そのため軍務省に勤めるのは、エリート中のエリート。

爵位持ち上級貴族の人間が多い。

「お偉いさんつて訳ですか。そいつは面白くない話つすね」

伍長の率直すぎる発言を、メイヴィスは聞き流したふりをした。
本来なら懲罰ものの失言だが、メイヴィスも本心では全くの同意
なのだから達が悪い。

しかし部下に同調して不満を増大させたところで、百害あって一
利無し。

少なくとも立場上は、軍上層部と上手く連携してみせる模範を示
す必要があった。

メイヴィスは足を止めると、わざとらしい仕種で肩を竦めてみせ
る。

「まあ、要は付き合い方ですよ。特務四課は、使徒教会の異端審問
官に相当する魔女狩り専門の部隊。残念ながら異端者や聖絶指定種
については、我々よりプロフェッショナル集団ですよ。せいぜいそ
のノウハウを学ばせてもらうとしましょう」

おまけに付いてきた竜騎士の青年はともかく、フレデリカの実力
は本物だ。

ただの貴族令嬢じゃない。

好き嫌いで相手の能力を見誤るのは、愚か者のすることだ。

「ただし、これは我々の戦争です。他の誰にも譲るつもりはありません。そのことを忘れたら、ぶち殺しますよ？」

「はッ。了解です！」

敬礼する部下を、メイヴィスは満足そうに眺めた。
軍務省がどれだけ現場に介入してきたところで、メイヴィス達の
目的は微塵も揺るがない。

ローランの魔女の首を獲る。

それだけが目的だ。

結果的に目的を達成できるのなら、手柄など軍務省にくれてやつ
ても構わなかつた。

「くはーっ、この愛くるしさは反則的だね！ 男子だといつギャップがまた、ポイント高いよ！ ヘイウッド家の使用人なんて辞めて、是非、我がショーター家に来たまえ！」

「はうあーっ、くすぐったいのデスよ！」

フレデリカ先輩にすっかり気に入られたシャルロが、抱きつかれて全身もみくちゃにされる。

シャルロが男の子ということは、これはもつ立派なセクハラではないだろうか。

羨ましい。

先輩がシャルロをいつまでたつても離さないという小さなトラブルはあつたが、現場検証そのものは滞りなく終わった。

後の調査はメイヴィス達に任せると、コリン達は騎士団の手配してくれた馬車に乗り込んだ。

「コリン達の馬や積荷は、後で騎士団が回収して屋敷まで届けてくれるという。

馬車で小一時間ほど揺られていると、車窓の景色が混沌とした貧民街から閑静な高級住宅地、そして緑豊かな庭園へと移り変わっていく。

やがて青い屋根をしたカントリーハウスの前に辿り着いた。停まつた馬車からまずはシャルロが飛び降りる。

続いてシャルロにエスコートされながら、フレデリカとコリンも馬車を降りた。

「ふむ。ボクは久しぶりに来たけれど、相変わらず素敵な「デザインの館だ」

「住みやすそうなカントリー・ハウスですね。うちの実家なんて、城塞スタイルだから見た目だけで息苦しくなっちゃいますよ」

「君のところは年季が入っているからね。帝国本島にも戦乱の時代があつたことを示す、貴重な歴史的建造物だよ。見学するには興味深いけど、ボクなら住みたいとは思わないね」

「先輩の実家だって、似たようなもんじゃないですか」

ヘイウッド邸は、帝国内でも比較的新しい部類に入るカントリー・ハウスだ。

住みやすさを最優先した造りからは、平和な時代に設計されたことが良く分かる。

白塗りの外壁に、青い屋根。

シンプルで爽やかな印象を与える外見は、古い城館にありがちな威圧感など全くなき。

若草色に覆われた周りの景観に良く調和していた。

「あれ？ 出迎えがないなんておかしいデスね？」

ドアノックカーを叩きながら、シャルロが小首を傾げた。重ねてノックを繰り返す。

やがてドタバタと物音がして、ようやく扉が開かれた。中から姿を現したのは、女性にしては長身のメイドだった。長い髪をサイドアップにまとめている。

肩で息をしながらも、彼女は商業スマイルを浮かべてお辞儀をし

てみせた。

「い、いらつしゃいませ、フレーテリカ・ショーター様。それにコリン・イングラム様も。お待ちしておりました、どうぞお入り下さい」

メイドに招かれて、コリン達は玄関ホールへ足を踏み入れた。ホールは吹き抜けになつていて、開放感を演出している。正面には大階段が据えられていて、来客者を一階の客間へと誘つていた。

「コリンの背後で、メイドとシャルロがひそひそと言葉を交わす。

「ちよつとシャルロちゃん、到着するの早すぎない？ 東街区まで迎えに行つたはずの、ミスターと一緒にじゃないの？」

「あは。だからスージーお姉ちゃん、そんなに慌ててたのデスね」

「どうやらメイド達にとつて、コリン達の到着は予定外だつたらしい。

東街区にコリン達が現れたといつ第一報を聞いて、接客責任者であるバトラーは迎えに行つてしまつたようだ。

騎士団の高速馬車でやつてきたコリン達とは、入れ違いになつてしまつたというオチだらう。

「シャルロ！ よつやく帰つてきたか！」

大階段の上から、少女の声がホールに響きわたつた。見上げると、ふわふわのフリルに彩られたドレスで身を包んだ女の子が駆け下りてくる。

流れるような金髪に、猫耳のようなリボン。

助走を付けた勢いのままシャルロに抱きつこうとした少女だつた

が、ぎょっとしたシャルロがコリンの背中に慌てて隠れる。

「何故逃げる！」

「いやだつてシェリー嬢様！ その手に持つてるのは何デスか？」

完全にびびった様子で、コリンを盾にしながらシャルロが突っ込みを入れた。

シェリー嬢様と呼ばれたこの少女こそが、ヘイウッド家の当主代行。

随分と可愛らしい御主人様だった。

ストレートの金髪と、少し吊り目な翠の瞳は、いかにも貴族令嬢といった顔立ちだ。

鋭い質問を受けたシェリー嬢は、手にした乗馬用の鞭をきょとんとした顔で見つめる。

「む？ お馬さんこの小道具だが？」

「何デスか、そのSMっぽい遊びは！ 痛いのとか嫌デスよー！」

「はー、シャルロはわがままだなー。しかしその程度のリアクション、私達は既に予想済みだぞ。仕方ない、馬役は私がやろう！」

シェリー嬢が鞭をシャルロに手渡した。

何気なく受け取るシャルロ。

そしてシェリー嬢はくるりと背を向けると、小さなお尻をぐいぐいとシャルロに押し付ける。

「さあ！ 思いつきり叩くがいい！ 遠慮は無用だ！」

「何で――――ツ？」

涙声で叫ぶシャルロ。

しかしショリー嬢は、むふーと期待に鼻息を荒くしながら、今か今かと一撃を待っている。

シャルロが何か言いたそうと、コリンを見上げた。

「いや、そんな田で俺を見られてもね？」

助けてあげたいのは山々だったが、状況がいまいち理解出来ない。やがて観念したように溜息をついたシャルロは、ほんの軽くショリー嬢の小さなお尻を鞭で撫でた。

「あひゃんっ」

「ぐ、変な声出さないでほしいのデスつ。何だかわたしがえつちなことしてゐみたいじゃないデスか！」

ショリー嬢の過敏な反応に、シャルロが耳まで真っ赤になりながら狼狽える。

そんなお子様一人のやり取りを眺めていたメイドが、頭痛に耐えるような顔をしながら口を挟んだ。

「ショリーお嬢様、お客様が既に到着しています。お喜びになるのは分かりますが、少しだけ自重して下さい。それにその鞭、一体どこで入手されたのですか？」

「つむ、リリから貸してもらつたのだ。乗馬じつには必需品だと聞いてな。他にこんなのも借りたぞ！」

嬉しそうにシェリー嬢が取り出したのは、猿ぐつわだった。
メイドがこめかみに怒りマークを貼り付けたまま、凄味のある笑顔を浮かべる。

「シャルロちゃん、お客様の案内は任せていい？　あたしは別の仕事をできちやつた」

長身メイドから立ち上る殺氣のオーラに、驚いたシャルロが目を丸くした。

止めるのは無駄だと判断したのだろう。
せめて死人が出るのだけは避けよつと思つたのか、フロアの奥に向かつて大声で叫んだ。

「リリちゃん逃げて――――――　本気で逃げて――――ッ！」

途端に、大階段の陰に隠れていた子供メイドがひょっこりと顔を出す。

髪型をツーサイドアップにした、いかにも悪戯好きそうな少女だった。

「てへ。やりすがちやつた？」

そしてそのまま、ドタタタタと猛ダッシュで逃げていく。

「逃がすか――」

間髪入れずに雷光のような勢いで、長身メイドが少女の後を追つた。

すっかり取り残された格好のフレデリカ先輩が、しみじみと呟く。

「ふむ。ボクも随分と変わり者だつて言われるけどね。そんなボクから見ても、この屋敷の住人はおもしろい人間が多そうだ」

「あ、先輩。変わり者の自覚はあつたんですね」

先輩が無言でコリンの臍を蹴り飛ばした。

激痛に足を押さえながら、コリンが床を転がる。

「だ、だだだ、大丈夫デスか？ 何だか凄い音がしたデスよ！ 包帯とかいるデス？ ミセスーーーつ、誰かミセスを呼んでーーーツ！」

「うわあっ、こいつ私のスカートを覗こうとしたぞ！ 変態か？」

「シェリー嬢様！ 足下へ転がってきたお客様の顔面を、そんな風に踏みつけちや駄目デスよっ！ 死んじゃう！ コリン様が、死んじゃうーーーっ！」

右往左往するシャルロ。

シェリー嬢に頭を踏まれて、顔面をカーペットに埋めるコリン。そんなコリンを涼しい顔で見下すフレデリカ先輩。到着早々、何でこんな目に遭わないと云いきれないんだろう。コリンはあまりの理不尽さに、赤い絨毯を涙で濡らした。

第2話・05 カントリーハウス4

ヘイウッド邸の朝食室。

テラスからは星空の下に広がる夜の庭園を見渡せた。
白と水色を基調とした爽やかな内装で、豪華な大食堂で食事をするより肩が凝らない。

そのためヘイウッド家では、身内だけの食事は夕食でも専らこの朝食室で済ませてしまつといつ。

食卓に着いているのは、シェリー嬢、フレデリカ先輩、コリンの三名だけ。

確かにこの人数なら、朝食室で充分だらう。

本来は地元の有力者達を集めて夕食会を催す予定だつたらしいが、先輩が事前に断つておいたらしい。

今回はショーター家の令嬢としてではなく、あくまで軍務省事務官として訪れているというのが建前上の理由。

本音のところでは、社交界的な付き合いが面倒だつたと見える。その点はコリンも全くの同意だつた。

兎のテリーヌ。レタスのコンソメスープ。カレイのムニエル。仔羊のゆで脚、ケッパーソース添え。フレッシュサラダ。カシスのシヤーベット。カスタードタルト。

並べられたのは異国の様式が取り入れられたコースメニュー。さすが貿易を生業としている領主の屋敷だ。

大味な帝国料理と違つて、舌が肥えているはずのコリンも満足出来る味わいだつた。

デザートの小皿も下げる、食後の紅茶が淹れられる。

コリンの給仕には、唯一メイド服を着ていない女性使用人が付い

てくれた。

メイド達の管理責任者である、ハウスキーパーだろう。

一方、フレデリカ先輩の給仕には、背筋をピンと伸ばした初老の男性が付いている。

彼が接客責任者のバトラーだ。

ちなみにシェリー嬢には、シャルロがくつついて給仕をしていた。もちろん使用人は給仕係の三人だけではなく、他のメイド達が忙しく部屋を出入りしている。

料理や食べ終えた食器を運ぶのは、彼女らの役割だ。

美少女揃いなメイド達を見やつて、フレデリカ先輩がふとした疑問を口にする。

「それにしてもこの屋敷のメイド達は、とても若い子が多いね。シャルロちゃんのような子供も働いているみたいだし、何か理由でもあるのかい？」

確かにそれはコリンも気になっていた。

とにかくヘイウッド邸の使用人は、年若い女性に偏っている。コリンの実家に居たメイド達は、ベテランのおばちゃんも少なくなかつた。

一般的なカントリー・ハウスでは、それが普通だ。

ヘイウッド邸の場合、女性最年長であるはずのハウスキーパーでさえ、見た目の年齢は二十代後半ぐらいに見える。

「理由というほどのことでもない。先代当主であるお爺様が、早々に引退してしまったからな。昔から仕えていた使用人達は、お爺様のいる別邸へ移ってしまっただけの話だ」

澄ました顔でシェリーが淡々と答えた。

玄関ホールでの騒動が嘘のように、今のシェリーは落ち着いている。

子供らしさをどこかに置き忘れてきてしまったかのようだ、大人ぶつた姿勢を維持していた。

礼儀作法は完璧ながら、活き活きとしていたシェリーを見た後だと、どこか無理しているように見てしまう。

「それなら男手も足りなくて大変だらうね？」

「いや、特に困つてはいない。確かに今は社交シーズンで、父上と共に使用人の半数も、帝都へ出掛けたままになつてはいるが」

フレデリカ先輩の唐突な台詞に、意図を掴みかねたシェリーが怪訝そうに眉を顰める。

ヘイウッド邸に着いてから、屋敷内でコリンの見た男性使用人はバトラーたつた一人だけ。

もちろん男の娘なシャルロちゃんは別格なので、男性使用人としてはカウントしない。

だからと言って、ヘイウッド邸のサービスに劣つたところは見当たらなかつた。

メイド達だけでも、問題なく屋敷の運営は回つているように見える。

やばい。

この流れは、先輩が良からぬことを企んでいるパターンだ。

コリンの不安を裏付けするように、先輩はシェリーの反応をさりとスルーして、話だけを先に進めた。

「ボクには一つ、気に病んでいたことがあってね。しばらくショリ一殿のところに世話になるというのに、使用人のひとりも連れてこなかつたのは、本当に申し訳なかつた。ボクとしたところが、やや常識に欠けていたね」

フレデリカ先輩が常識を語り出すとか、食事に何か変なものでも混ざつっていたのだろうか。

客先に長期滞在する時には、自分の身の回りの世話をさせるための使用人を同行させるのが社交界でのマナー。

しかしそんな常識に捕らわれたことを、この先輩が気にするはずもない。

これは罷だ。

コリンの直感が囁く。

「だから提案なんだけど、うちのコリンを、使用人として引き受けではもらえないだろうか？」

「異議あり！ ちょっと先輩、いきなり何を言い出しているんですか？」

コリンが拳手して、断固抗議した。

何か怪しいと思っていたら、やつぱりだ。

この先輩、とんでもないことを思い付きやがった。

もちろんコリンの反対意見に、先輩が耳を貸すはずもない。

援護射撃は、予想外の方面からやつてきた。

「//セス、どう思つ？」

「とてもありがたいお申し出ですわ。フレデリカ様、お心遣いありがとうございます」

ショリーから発言を許可されたハウスキーパーのミセスが、につ
こりと微笑む。

「ただ、コリン様には家事のご経験はあるのでしょうか？ 一朝一
夕で身に付くものではありませんし。ご本人もあまり乗り気でない
様子。お嬢様、今回はお気持ちだけいただくということで、いかが
でしようか？」

「いいぞ、もって言つてやつてくれ。

もちろん「コリンに、家事の経験などない。

「コリンだけが特殊なのではなく、帝国貴族なら誰だつて似たよう
なものだ。

ところがそんな反論で挫けるフレデリカ先輩ではなかつた。

「あー、ちょっと物言いが恩着せがましかつたね。言い直すよ。こ
の屋敷でコリンに、使用人として労働者階級の生活といつやつを経
験させてほしいんだ」

先輩が切り口を変えて攻める。

「コリンのことを指差しながら、それらしい説明を重ねていく。

「コリンは箱庭育ちの世間知らずでね。このままでは公爵家の後継
者としては心許ない。何とかしてやつてくれと、彼の父上からも頼
まれているんだ。そのためには是非、ヘイウッド家にも協力してほ
しい」

「はあ。確かに以前は、貴族のご子息が使用人の仕事で社会経験を
積むことは、一般的でしたわね。そのような理由でしたら、特にお
断りする理由はありませんが」

「折れちゃつた！」

この場で唯一の味方が、あつさりと引き下がる。

ハウスキーパーも、結局のところは市民階級でしかない。

フレデリカ先輩のような上級貴族から強く頼まれれば、断れるは
もなかつた。

後はもう、コロン達と同じ上級貴族の一員であるシエリーに期待するしかない。

「 そ う か 。 ミ セ ス が そ う 言 う な ら 、 私 は 構 わ な い ぞ 。 フ レ デ リ カ 殿 の 提 案 を 受 け 入 れ よ う 」

「ありがとうシリード殿。感謝するよ」

興味もなさそうに言い捨てたショリーに、先輩が握手を求めていた。

「どうぞ、先輩！」

くつねせいね。ボクには考えがあるんだ。自分の勉強のためだと思って、素直に受け入れておきたまえ。これは特務四課としての正式な命令だよ。>

「レーベン」

わざわざフレデリカ先輩が、声に出さないで法術通信で釘を刺してくる。

何を目的としているのか、さうばかり検討が付かない。

とりあえず先輩がハウスキーパーに説明した内容が、嘘っぱちだ
ということだけは確かだ。

命令と断言されてしまつては、コリンに逆らう術はない。

「あは。 それならわたしは、コリン様の先輩になるのデスね」

心の救いになつたのは、シャルロの笑顔だった。

両手を合わせたポーズで、にこにこと嬉しそうにしている。

先輩の狙いは分からぬが、あまりネガティブに考えても仕方ない。

唐突すぎる展開ではあつたが、ここは割り切りが大切だろう。

「わかりました。経験不足は否めませんが、どうかよろしくお願ひします」

「コリンは椅子から立ち上がると、シーリー や ミセス、バトラーに頭を下げる。帝国には一つの国民が居るといつ台詞は、誰の言葉だったか。

階上の世界と、階下の世界。

コリンは階級社会といつ階段を、ひとつと下り始めた。

王国の夕暮れ亭は、東街区でもつとも繁盛していると評判のパブだ。宿屋や夜のサービスも兼ねているだけあって、規模も大きい。王国系移民が経営しているだけあって、食事の美味しさには定評があった。日の沈んだこの時間帯は、仕事を終えた労働者達で賑わっている。

そのパブには現在、物々しい一団が訪れていた。人目を引く彼らは、隠されるようにして素早く奥のVIP室へと通される。

「今月分の寄付です・どうぞお納め下さい」

不景気そうな顔をした中年の男が、皮袋を客人に差し出した。身につけた上等なスーツが、貧相な風体にひどく似合っていない。男はこのパブのオーナーにして、東街区の移民街を縄張りとするマフィアの幹部だった。

「おや、先月より軽くありませんか？ 街中を回った様子では、それなりに景気は良さそうに見えましたけど？」

袋に詰まつた金貨の重量を確かめながら、客人が言った。部下の兵士を引き連れて店にやつてきた客人は、フローマス騎士団所属のメイヴィス少尉。ソファに座つているのはメイヴィス一人で、兵士達はその背後に立つてマフィア共に無言の圧力を掛けている。

受け取つた金貨は、寄付という名の上納金。東街区では非合法なビジネスが横行している。その金の流れは膨大だ。しかし元が非合法なので、税金を取り上げるための根拠がない。

そこでマフィアの出番だった。蛇の道は蛇。金の臭いを敏感に察知する彼らの取り立て能力は、正規の徴税官などよりずつと優秀だ。マフィアの不法行為に目を瞑る、その代償がこの月々の寄付金だつた。東街区には、こうした不文律のルールが数多く存在する。メイヴィスに凄まれた幹部が、はは、と薄ら笑いを浮かべる。

「景気が良くなるのと、うちの収益はまた別の話ですから・最近は

余所者が増えた上に、隣りのファミリーがうちのシマを荒らしていく
ましてね・こつちは商売上がつたりです・旦那のお力を借りること
が出来れば、簡単に解決できる話なんですかね?」

寄付金の増額と引き替えに、暗に協力を求める幹部。メイヴィスは
につこりと微笑んでみせた。

「そいつは愉快なお話ですね」

次の瞬間、テーブルの上のグラスが弾け飛んだ。身を乗り出したメイヴィスが、幹部の髪を鷲掴みにする。ぎりぎりと捻り上げられ、幹部の後退しつつある貴重な髪の毛が今にも引きちぎれそうだった。「マフィア間の抗争には不介入・それがルールでしょ?」都合の悪くなつた時だけ助けを求めるなど、ぶち殺しますよ?「

「ひいっ」

マフィアの暴力など、所詮はアマチュアレベルだ。戦争を生業とする騎士団にとつては、都合良く仕える手駒の一つでしかない。ただ、絞り上げすぎて潰してしまつのも、何かと面倒だった。メイヴィスは幹部の薄い頭髪から手を離すと、出来るだけ柔軟な笑みを浮かべてみせた。

「まあ、魚心あれば水心とも言います・こちらの件で協力してもら
えれば、寄付金については相談に乗つてあげましょ?」

「はは、そいつはびうも」

乱れた髪とスーツを整えながら、引きつった顔で幹部が応じる。そうしてメイヴィスが差し出したのは、真新しい似顔絵だった。賞金首のチラシ。殺害された絵描きとは違う、別の女性の顔が描かれていた。記載された賞金額を見て、幹部がじくりと唾を飲み込んだ。

「賞金はフローマスからだけではありません・軍務省、聖書教会からも、別々に提供されます・中型の商船ぐらいなら、軽く買えますよ・夢があると思いませんか?」

「悪夢ですね」

幹部が額に冷や汗を浮かべながら呻く。さすがはマフィアの金庫番。金額だけに目が眩むことがなく、想定されるリスクを正確に推測し

ていた。

「ローアンの魔女・伝説ならオレも聞いたことがあります・そんなお伽噺を相手に、オレ達に何をしようと? 旦那にはオレが教会の祓魔師にでも見えましたか?」

「お伽噺ではありません・実在する聖絶異端種ですよ・何も貴方達に退治しようと言っている訳ではありません・ただ、情報を集めてくれればそれで構いません・居所さえ掴んでくれたら、そこに書かれている金額の十分の一を支払いましょう」

「こんな大物が、東街区に潜伏していると? 例の連続騎士襲撃事件の絡みですか」

「詳しく説明しましょう」

メイヴィスはローアンの魔女について、幹部に説明をする。似顔絵に描かれたのは、五年前の姿であること。当時の姿は大人の女性で、攻城戦の際に片眼を失っていること。現在は姿を変えている可能性が高いこと。通常の竜騎士法術程度では太刀打ち出来ないこと。話を聞くほどに、幹部の顔色が悪くなっていく。

「もちろん協力は惜しみません・しかしこの件なら、オレ達よりも自治会の方が適任では?」

東街区は微妙なパワー・バランスの元に成り立っている。建前上の統治者であるフローマス騎士団は、間接的にしか関わっていなかつた。代わりに住民間のトラブルを処理しているのが、小地区を縄張りとする数多くのマフィア組織だ。ここの中でもそうしたマフィア構成員の一人になる。

さらに自治会というものが別に存在していた。聖絶指定種の保護特区という側面を持つ東街区を、そちらの方面から治めているコミュニティだ。メイヴィスも全容を掴めていないが、会員の多くが異端者級の化け物だという。幹部も指摘する通り、今回の件には彼らの協力も不可欠だつた。

「もちろん自治会にも声は掛けます・ただ、彼らは単独行動の傾向が強く、組織への帰属意識が薄いですから・こうした情報収集には

不向きでしょ」「う

さうに騎士団との繋がりも弱い。どちらかと言えば、教会やフレーリカ達の専門分野だらう。幹部は受け取った賞金首のチラシを部下に渡すと、話をまとめに掛かってきた。

「とりあえず義眼にしている可能性も含めて、隻眼の女性を捜してみます・他の手掛かりは、五年前から連續襲撃事件が始まった頃までの間に、この街にやつて来た人物つてところですか」

「期待していますよ」

「誠意ある対応をお約束しますよ・それではお互い、良いビジネスを

握手はない。

メイヴィスは立ち上がり、兵士達を連れて部屋を後にした。しかし、言い忘れていたことを思い出し、足を止めて振り返った。

「そうそう、もう一つだけ・現在、この街にはショーター家の『令嬢がいらっしゃっています・目的は私達と同じく、ローランの魔女の首・近づいていたりする店にも来るでしょう・せいぜい気を付ける」とです」「

「ご忠告どうも」

「彼女に比べたら、私達なんて可愛いものですよ」

フレデリカがどのように動くのかは、メイヴィスも興味があった。幹部が勘弁してくれという風に、天を仰いだジェスチャーをしてみせる。幹部にはせいぜい、苦労してもらうしかない。その結果、どれだけ彼の禿げが進行したところで、メイヴィスにとつては関係のない話だった。

夕食と入浴を済ませたコリンは、シャルロに屋敷内を案内しても
られることになった。

貴族の住まうカントリー・ハウスには、一つのエリアが存在する。
コリン達がこれまで田にしてきたのは、屋敷における一部分でし
かない。

それとは別に、貴族階級の人間なら普段は立ち入らない区画があ
つた。

表舞台と、舞台裏。

その一つは物理的にも、明確に区分されていた。

ハイウッド邸もその例に漏れず、屋敷中の至る所にバックヤード
への入口が隠されている。

「リンにとつては使用人区画に入るだけでも、貴重な体験だった。
好奇心が刺激される。

「すうじー！ まるで秘密基地みたいだ！」

「あは、そんなにいいものじゃないと思つテスよ？」

シャルロに案内されながら、東棟にあるキッチンから地下階へと
降りる。

バックヤード区画は、表のフロアとは別世界だ。
質素という表現が一番ぴったりくる。

内装は実用性とコストを最優先。

絨毯はもちろん、壁紙すら貼られていなかつた。

「「」の薄暗さが雰囲気出てるね！ でもこれ、仕事する時に支障ないの？」

「んー、わたし達には普通なんデスけどね」

地下フロアは半地下構造になつていて、一応は天井近くに採光用の窓は付いている。

しかし田の沈んでしまつたこの時間帯では、わずかに灯されたランプの光だけが頼りだつた。

「さて、「」が使用人ホールなのデスよ

階段を下りてすぐに位置する大部屋は、使用人達の食堂を兼ねているだけあつて、広さはそれなりにある。

中で待つていたのは、「コリン達がヘイワッヂ邸へ到着した時に、出迎えてくれた長身のメイドだつた。

「スージーお姉ちゃん、コリン様をお連れしたデスよ」

「お疲れ様。案内ありがと」

スージーと呼ばれたメイド長が、暖かみのある笑顔でシャルロに労いの言葉を掛ける。

それから表情を仕事モードに切り替えると、コリンに向かつて優雅に一礼してみせた。

「「」足労ありがとうございます、コリン様。あたしは当家でメイド長を務めさせていただいております、スージーと申します」

オーソドックスなメイド服。

長めのロングヘアを、サイドテールにまとめていた。
とにかく足が長い。

腰の位置の高さが、ファッショング雑誌のイラストみたいだ。
胸の厚みがやや足りない点を除けば、スタイル抜群の美人さんだ
った。

「話はミセスから聞いております。使用人生活を体験されたいとい
うことで、承知致しました。ご要望などありましたら、何なりとお
申し付け下さい」

「コリンは何となく違和感を覚える。

礼儀正しいスージーの対応には、全く文句の付けようがない。
しかし、同じ使用人仲間を相手にした態度とも思えなかつた。
あくまで「コリンのことは、客人として見なしているようだ。

フレデリカから言われたセリフが頭に浮かぶ。

「いいかい、コリン。君が使用人になる目的はね、身も心も労働者
階級の人間に成り切つてもらうためだよ。特務四課の班員として、
そろそろ君にも複数の顔を使い分けてもらいたい。大切なのは、相
手と同じ目線に立つことだ。この経験は将来、君が公爵になつた後
にもきっと役に立つはずだよ」

急に使用人になれと言われた時は、單なる嫌がらせじゃないかと
疑いもした。

しかし先輩もそれなりには考えていたらしく。

とにかく最初のミッショーンは、このメイド長と打ち解けることだ。
そのためにも先ず、緊張を解いてもらわないといけない。

コリンはその場で膝を付くと、恭しくスージーの手を取つてみせ

た。

そしてそのまま、手袋に優しく口付けをする。

コリンにとつては、最大級に敬愛の意志を示したつもりだった。顔を上げると、にっこりと爽やかな笑顔を演出する。

「お会いできて嬉しく思います、ミス・スージー。これからしばらくお世話になります」

しかしスージーのリアクションは、完全に予想外。

「ひいっ、きもいッ！」

ぞわぞわっと身震いしたスージーに、コリンの手は乱暴に振り払われてしまった。

隣ではシャル口も、目を丸くしている。

何か失敗してしまったのか？ スージーは手袋を脱ぐと、ペしやりとコリンの顔面に投げつけてきた。

おかしい。

確かに手袋を投げつけるのは、決闘を申し込む時の正式な作法だったような気がする。

「有り得ないからッ！ あーもう、最悪！ まだ寒気が収まらないわ！ 何なのこいつ、生理的に受け付けないんだけど…」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！ 本音がただ漏れになつてるデスよ！ 深呼吸するのデス！」

慌ててシャル口がフォローに回る。

スージーは何故か、かなりの大ダメージを負った様子だった。

シャル口に渡された水の入ったグラスを受け取りながら、スージ

一がぶつぶつと何事か呟く。

「ありがと、シャルロちゃん。大丈夫、あたしはやればやれる子よ。」ねぐらじの試練、見事に克服してみせるわ……！」

「その意気なのデス！ 頑張るのデスよ！」

まるでコリンが何が悪いことをしてしまったかのようだ。

凄くこの場に居づらい。

スージーは呼吸を整えると、意を決したように再び姿勢を正してコリンに向き直った。

「話はミセスから聞いております。使用人生活を体験されたいということで、承知致しました。」」要望などありましたら、何なりとお申し付け下さい」

「何事もなかつたことにされた――ツ？」

「はい？ どうかされましたか？」

にっこりと微笑むスージー。

作り笑い感が半端ない。

営業スマイルが痛々しそぎて、見ていくつちが辛かった。

「いえ、あの、『迷惑お掛けしてしまつてゐみたいで、本当すいません』

ペコりと頭を下げるコリン。

何か言いたそうなスージーだったが、必死に言葉を飲み込んでいる。

「コーンは手招をしてシャルロを呼ぶと、耳元で「そつ尋ねてみた。

「あれ、何となく俺、あのメイド嫌われてない?」

「え? あれ? ま、まさか、そんなはずがないの? トスよ? あははは」

田線を泳がせながらシャルロが答える。
嘘の付けない良い子だった。

そんなところもこちこち可愛い。
男の子なのが本当に残念だ。

そしてビーナスから最初のミッションとして、スージーはかなり手強い相手らしいことについても分かった。

何か作戦を考えなこと、すぐには心の壁を開いてくれそうにはない。

「やつだシャルロちゃん。コーン様をベッキーのところに連れて行つてくれない? 新しい制服を用意させてあるから。そいつと同じ空気吸つてたら、本当に気持ち悪くなつてきたわ。早いところ、さつとと外に連れ出しちゃつて。その間にあたしも立て直すから」

「聞いえてるからね? とか本音を隠すつもり、実はないでしょ? 俺、泣いちゃうからね?」

「こえ、お気にないが。コーン様はおつまさんのです」

「やの理屈は無茶すぎるー。」

「あは。それじゃコリン様の制服を取りに行くのデスよ」

後味の悪さを残しながらも、コリンはシャルロに背中を押されながら使用人ホールを後にした。

使用者ホールを追に出されたのは、ヘイウッド邸の洗濯室だ。

かき混ぜ棒付きの洗濯槽に絞り器、アイロン台とこつた様な道具が所狭しと並んでいる。屋敷で使用される熱湯を供給するための、ボイラーも設置されていた。

「そういえば、シャルロちゃんって男の子なんだよね？」

「もちろんなのテスよ」

何故か得意気に胸を張るシャルロ。もちろんという表現には、かなり強い抵抗がある。

「だったら何で、メイド服を着てるの？ ずっと疑問だったんだけど」

「あは。それは単に、わたしのサイズに合った男の子向けの制服がないからのテス。本当ならわたしも、ちゃんとしたテーラードコートがほしいのテスけど」

「騙されてるーーー！ それ絶対に、シャルロちゃんにメイド服を着せるための口実だからー。ヘイウッド家ぐらいの規模なら、制服を仕立てるお金ぐらいケチらないって」

「だけどお屋敷によつては、制服つて支給してもらわなくて自分の費用で用意するものテスから。贅沢は言えないのテスよ？」

おそらくは当主代行であるショリーの仕業。

シャルロに女装させて喜ぶなんて、まだお子様だといつに何といつ変態淑女だらうか。

しかしコリンとしても、その方針には大賛成だつた。

コリンの財力でもテールコートをプレゼントしてあげるぐらいは容易いが、ここはショリーに便乗しておく。

シャルロのメイド服が見られないなんて、絶対に嫌だつた。

「それにしてもここは洗濯室、誰も居ないね。時間帯にもよるんだううけど、俺の実家ならもつと騒がしい場所なんだけどな」

器具だけは揃つてゐるが、人の気配がない。

部屋から回収されたと思われるシーツも、隅に置まれたままだ。

アイロン台に置かれているのは、シャツ類ではなく新聞紙。

インクを乾かすための作業に使つたのだろう。

「それはねつ、つちでは洗濯の大半は、外注さんにお願いしているからさつ」

澆刺とした声に顔を向けると、ふわふわのドレスを山ほど抱えたランドリーメイドが、向かいの衣装室から出でてくるといつだつた。ぽふつと中央の作業台にドレス類を放ると、メイドは片手を上げて自己紹介をする。

「やー、おこりなばベッキー。ヘイウッド邸のランドリーメイドわつ。ま、そんな肩書きは名田だけで、実際は裁縫や帽子作りをしている方が多いけどねー！」

ボーアッシュュで澆刺とした女の子だつた。

耳にかかる程度の長さで短くカットした栗色の髪に、眼鏡を掛けている。

帽子作りなど本来ならレディースメイドの仕事。

しかしシャルロの解説によると、ヘイウッド邸における衣服の管理は、全て彼女に一任されているということだった。

ベッキーは手慣れた様子でメジャーを引き出すと、コリンに向かって、にかつと笑ってみせた。

「君がコリンくんだね？ スージーくんから聞ってるよ。軽く採寸するから、ちょっと脱いでくれる？」

紳士に向かっていきなり脱げとは、まるでフレデリカ先輩みたいだ。

学生時代のコリンなら、年頃の娘にそんなことを言われたら赤面してしまうシーンだらう。

しかし先輩のおかげで、コリンの羞恥心は鋼のようく鍛えられた。一片の躊躇もなく、ぶわっと優雅に上着を脱ぎ捨てるコリン。ダンスでも踊るかのような仕種でベルトを引き抜き、ズボンに手を掛けたところでベッキーが制止の声を上げた。

「いやいや！ 全裸になってくれとは言つてないからね！ シャツとズボンはそのまま結構だよー！」

「あ、そつなの？」

「何でそんな残念そうな顔をするかな！ 君は露出すると興奮するタイプなのかい？ ほら、もういいから手を挙げて！」

万歳のポーズを取ったコリンの胸板に、ベッキーがメジャーを回

す。

ベッキーの頭が、コロンの鼻先に近づいてシャンプーの香りがふんわりとした。

抱かれるような姿勢になつて、少し恥ずかしい。

「シャルロくん、読み上げた寸法をメモしてくれるかな！ 今日のところは既製品で我慢してもらつけど、近いうちにオーダーメイドで仕立てるからね！」

「オーダーメイド？ ここの屋敷ではみんなそうなの？」

「そんな訳がないさ、コリンくんだけの特例だよ！ スージーくんからは、予算上限なしで注文されているからね！ おいらとしては男物よりメイド服の方が、デザインするのは楽しいんだけどやー！」

「何だか悪いね。シャルロちゃんなんて、既製服のサイズが合わないつて困つてたのに！」

他のメイド達も居る手前、自分がだけが特別扱いといつのは気が引ける。

かと黙つて断るのも失礼に当たりそうで、コロンとしては躊躇どころだった。

「あは、わたしのことなら気にしないでほしいのデス。実はわたし、子供用のコートを自分でも買えるように、頑張つてお金を貯めてるのデスよ。もちろんまだ、布代にもなつてないデスけど」

シャルロの気遣いが、逆に切ない。

コリンにとつては端金でも、シャルロ達のような労働者階級の人間にとつては服の値段というのは大金だ。

特にヘイウッド邸という格式に見合つだけの制服となれば、それなりの上等品。

シャルロの給料で何ヶ月分になるのか、金銭感覚に疎い「リン」には想像も付かなかつた。

「そんなシャルロに、私からプレゼントだー！」

明るい声に振り向くと、洗濯室の入り口に金髪碧眼の少女が立っていた。

アリ川のトレスに猫耳のほいりホン

ノコニシミ股三青二三草ソリハシテナ

夜も更けてきたというのに、元気いっぱいだった。

「シャルロの男装趣味は、前から知っていたからな。密かにベッキーに命じて、作らせていたのだ。ベッキー、もう出来ているのだろう?」

「 もういいやれー。ねーらいはこれでもプロだからね、 一度約束した納期は守るよー。」

「何故そんな余計なことをした————ツ！」

シェリーに裏切られた思いで、コリンが涙声を上げた。

そんなことをすれば、シャルロのメイド服が見られなくなってしまう。

「何だ、コリン殿も居たのか。貴殿の懸念も分からぬではないが、まあ、私に任せておけ」

「おやおや、ショリーちゃんは何を言つてゐるんだい？ 僕は別に、シャルロちゃんのメイド服が見られなくなることを、残念がつたりはしてないよ？」

表向きは紳士のふりを忘れないコリンだった。

「わあ、とつても嬉しいのデスよ！ ショリー嬢様、ありがとなのデス！」

「シャルロに喜んでもらえると、私も嬉しい。ほら、早く着て私も見せてくれ」

ベックキーに連れられて、つきつきとした足取りでシャルロが向かいの衣装室に引き込む。

ところがベックキーだけが、黒のテールコート一式を持って洗濯室に戻ってきた。

「危つく忘れるところだつたよ！ はい、これがコリンくんの制服さ！ とつあえずは仮だけどね！ 適当にぱぱっと着替えておいておくれ！」

そして再び衣装室に消えてしまった。

もそもそと使用人服に着替える「ワーン。

隣には期待に目を輝かせるショリーが居たままだつたが、コリンの存在など最初から眼中にない様子。

ショリーの視線は、シャルロの出でいつた扉に釘付けになつたままだつた。

「さあ、お待ちかね！ シャルロくんの、新作衣装のお披露目だ

ババーンっと効果音を口にしながら、ベックキーが洗濯室の入り口を開けた。

一拍置いて、着替えたシャルロがもじもじ内股で恥ずかしそうに姿を表す。

「キタ————ツ！」

「」「これは……？」「

歓声を上げるショリー嬢と、息を飲むコリン。

衣装デザイナーでもあるらしいベックキーは、得意気な顔をしてシャルロの隣で胸を張つていた。

シャルロの新しい制服は、確かにズボンタイプ。

ただし、ギリギリまで丈を短くした短パンに、ニーソックス。

シャツは胸元を辛うじて隠すばかりで、おへそが覗く大胆なデザ

インだ。

「おかしいデスよねつ？ これ、わたしが思つてたイメージと全然違うのデスよつ？ 明らかにメイド服の時より、露出が増えちゃつてるデスから！」

「うはーーーーー、たまらんな、これは！ ベックキー、ナイス仕事だ！」

「もちろんだ！ 何しろおいらの自信作だからね！ シャルロくんといつ最高の素材を活かす仕事ができて、おこりも誇りじいよー！」

「「コンセプトからして大間違いなのデスよつ、コンコン様からも何か言ってやつてほしのデス！」

「え？ ああ、うん。 とっても男らしこと想つぜー！」

親指を立てて、ぱちぱちウイーンクするコン。

「嘘つきさんデス――！ やつぱつわたし、着替えてくるのデス！」

「ああーーつ、何で――――つ？」

羞恥に耳まで真っ赤になつたシャルロが、衣装室へと逃げ込んでしまう。

再び姿を現した時には、すっかりいつものメイド服姿に戻つていた。

疲れきつた様子で、ぽつりと呟く。

「シェリー嬢様に期待したわたしが、浅はかだつたのデス。 やつぱり地道にお金を貯めて、自分で制服を買つのデスよ」

「何とこいことだー、ベッキー、ビツやらまた失敗したよつだぞー！」

「うーん。 なかなかシャルロくんのじ要望は難しいね！ まあ、次があるわー！」

「次はないのデスよ！ というかこれでわたしの制服、何着田デスか？ いい加減、もつたひないのデス」

男物の制服を持つていなないシャルロだったが、メイド服だけは何

着も所有していなかった。

後で聞いたところによると、屋根裏にはシャルロ専用の衣装部屋もあるところ。

ただ、ほとんどの服が一度着られたきりで、一度と出番はないようだ。

「だったら着たらいんじゃないかな！ その方が服だって喜ぶよ！ シャルロくんは贅沢ものだね！」

「うう。ならせめて、リリちゃんやエリカちゃん達にあげてほしいのデス」

「そいつは難しい相談さー。リリくんは古着屋に売つ払おうとするし、エリカくんは恥ずかしがって着てくれないからねー。何ならシャルロくんが、リリくん達を説得してくれたらいよいよー。」

「リリちゃん達でさえ着ない服を、わたしに着せないでほしこのース！」

どうやらシャルロが希望する制服を手にするのは、かなり先にならうな様子だった。

しばらくはシャルロのメイド服姿を愛でる」ことが出来やつで、リンは安堵する。

落ち着いたところで、「リンはふとした想い付きを口にしてみた。

「ところでも、俺も使用人服に着替えてみたんだけど、どうかな？ 似合ひやつへー。」

「黒いな。ああ、シャツは白いか

「既製服だけど、生地と仕立ては悪くないね！　流石は一級品だよ！」

「コリン本人の存在 자체には、興味ゼロの女性一人だつた。

「あは、わたしはとつてもお似合いだと思つのですよ？」

取つて付けたようなシャルロのフォローが、空しく聞こえる。落ち込むコリンの耳に、ジヤラリと鍵束の音が響いた。その音にびくつと反応したのは、シェリー嬢だ。

「あら、お嬢様。いらっしゃつたのですね。もうお休みの時間ですわ。さあ行きますわよ」

にっこり微笑を浮かべた、パーラーメイドのミセスがそこに立っていた。

言ひ訳をしようとした口をぱくぱくさせたシェリー嬢だが、やがて力なく頃垂れると、すくすくミセスについて出て行つてしまつた。

去り際に名残惜しそうに振り向いてきたが、シャルロの完璧な笑顔に弾かれてしまう。

「シェリー嬢様、おやすみなさいなのデス」

「うへ、シャルロの薄情者へ」

少しだけシェリー嬢が可哀想に見えた。

コリンも子供時代は、ナースメイドに厳しく躰けられたものだ。

「さて、コリン様の制服も用意出来ましたし、わたし達も寝る用意

をするの「トスよ」

「アハ、いえ、俺って、ビリで寝たりいんだろ、ひへ。」

「んー、コリン様用の客室も、事前に用意はしてあったの「トスけど」

しかしもちろんそれは、客人向けの豪華な部屋なのだといつ。
まさかコリンが使用人の仲間入りしてくるとは、完全にシャルロ
達にとつても予定の範囲外。

今頃はメイド長が、慌ててコリンのための部屋を選んではすだと
シャルロが説明してくれた。

使用者ホールに戻つてみると、メイド長は先程の動揺からすっかり立ち直つていた。

いかにも瀟洒なメイドさんという雰囲気だ。

とてもコリンに手袋を投げつけた人とは、同一人物とは思えない。コリン様のお部屋をご案内する前に、少々立ち入ったご質問をさせていただいても宜しいでしょうか？ 色々と氣を配るのにも疲れたので、もうストレートに聞いてしまおうかと

「はあ、それはもちろん構いませんけど」

表向きは一寧な物腰なのに、投げやりつぱりが隠し切れていないメイド長だった。

「えー、コリン様は、フレデリカ様と恋仲という認識で宜しいんですね？」

「ねーーーーよッ！ なにその発想、気持ち悪い！」

コリンは脊髄反射的に叫んでいた。

ちらりと想像しただけでも、血の気が引く。

「本当に勘弁してくれないかなッ？ 僕と先輩との間に、そーいうのは一切ないから！ どっちかと言うと俺の位置付けは、先輩の保護者とかそんな感じだよ！ 危なっかしい娘を見守る、お父さんの的な？」

「人がいないと思って、好き勝手言つのは止めたまえ！ 誰がボクのお父さんだよ！」

脳裏に響くフレデリカ先輩の怒声。

どうやらコリンの聴覚情報に、接続したままだったらしい。割り当てられた客室に居る先輩の怒りが、地下室の使用人ホールまで通信法術でダイレクトに伝わってきた。

「先輩、俺の感覚に無断で接続するの、止めてもらえませんか？ 俺にも気の休まる時間ってやつが欲しいんですけど」

「はー！ 君にそんな時間がある訳ないだろーー！ とにかく君の暴言については、深くボクの心に刻みつけておいたからね。後で覚えておくといいよーー！」

ぶつり、と通信法術が一方的に切断される。しかし監視されているような視線は、相変わらず背中に貼り付いたままだ。

こんな化け物みたいな相手に、恋愛感情を抱くなど有り得なかつた。

そんなコリンの反応を見て、メイド長が残念そうに視線を落とす。

「そうですか。一応はフレデリカ様の隣の部屋を用意してあつたのですが。ドントディスター・ブカードを掛けておいてもらえば、お二人の邪魔も致しませんし」

「いらない気遣いすぎるー！」

「それでは本当に、私共と同じ使用人部屋で宜しいのですね？ 貴族育ちのコリン様にとつては、決して寝心地も良くありませんし、

何かとい不便かと思しますよ?」

「！」まで来て、悪あがきはしないよ。こうなつたら徹底的に、同じに扱ってくれていいから

「いや、そんなに強がらなくもいいんですけど。まだ引き返せますからね?」

やけに抵抗するメイド長だった。

正直などこのコーンは、貴族にしては質素な環境への耐性に自信がある。

学生時代は寄宿学校での集団生活だったし、卒業してからはフレデリカ先輩に連れ回されて野外サバイバルの経験も少なくはなかった。

まさか廊下で寝ろなどとは言われないだろうが、ある程度までの覚悟は出来ている。

「コリンの意志が変わらないと見ると、メイド長は諦めたよ」と溜息を付いた。

「分かりました。仕方ありません。それではコリン様は、シャルロちゃんとの相部屋でお願いします」

「……え?」

「わあ、それは素晴らしいのですよ。これで何時でも、わたしと一緒にテスね!」

笑顔を輝かせるシャルロ。

「コリンはと言つと、いまいち理解が追いついていなかつた。

「あれ？ え？ ちょっと待って、それってマズくね？」

「もちろん、あたしとしては大反対です。しかし残念ながら、男性使用者の部屋割りはバトラーであるミスターの管轄ですから」

女性使用者と男性使用者とでは、指揮系統が違う。
そしてメイド長は、女性使用者の中間管理職だ。
ミスターの采配には口が挟めないらしい。

メイド長が心配そうな顔をして、シャルロの頬を優しく撫でる。

「ごめんね、シャルロちゃん。阻止してあげられなくて。何かあつたら、すぐに対応するよ」

「あは、くすぐったいのデスよ。それにわたしは、人数の関係でずっと一人部屋だったデスから。ルームメイトが出来るのは本当に嬉しいこのデスよ」

名残惜しそうにシャルロの頬から手を離したメイド長は、きつ、と親の敵でも見るような目付きでコリンを睨み付けてきた。

「いくらシャルロちゃんが可愛いからと言つて、いかがわしい行為に及んだら許しませんからね。いくら貴族様でも、不慮の事故があるということを覚えておいて下さい」

「そんなことしないからー。あとマジな目で齧るの止めてくれないかな！ 本気で怖いから！」

メイド長の目付きが殺る気満々すぎる。

とりあえずコリンが全く信用されていないことだけは良く分かっ

た。

フレデリカ先輩からは、労働者階級の人間に成り切るためにも、メイド達と早く打ち解けるようにと指示をされている。それは初っ端から、かなり難航しそうだった。

明日から頑張ろう。

コリンは自分に言い聞かせた。

第2話・10 カントリーハウス5

ヘイウッド家では、女性使用人の部屋は使用人ホールと同じ半地下フロアに配置されている。

メイド達のことを、階下の人々と呼称する由来がここにある。ちなみに男性使用人の部屋は屋根裏。シャル口に案内されて、コリンは男性使用人区画まで上がってきた。

「さ、どうぞ。遠慮なく入ってくださいデス！」

「失礼しまーす」

騎士団が運んできてくれた自分の荷物を部屋に持ち込む。

とてもシンプルな部屋だった。屋根裏ということで壁の一部が傾いており、慣れるまでは圧迫感を覚えてしまう。

ただし出窓が付いているので、採光や換気の面では地下室より恵まれていた。

贅沢は言えない。

今も月の光が射しているおかげで室内は明るく、満月の夜ならランプなしでも平気そうだった。

寝るためだけの場所という表現がぴったりくる。部屋にも本当に何もなかつた。

スペースの大部分を占有しているのは、木製の二段ベッド。他には小さな机と、洗面台がひとつだけ。壁にはシャル口のメイド服がひと揃いぶら下がっていた。

「コリンは持ち込んだ荷物から寝間着代わりのシャツを取り出すと、残りをベッド下の収納スペースへ放り込む。

テールコートを脱ぐと、それを壁の余っていたハンガーに掛けた。ふと見ると、シャルロも同様にメイド服から寝間着へ着替えようとしている。

「ツ？」

カチューシャとエプロンを外し、上着を脱ぐ。
そしてコリンの視線を気にすることなく、スカートもあっさりと外してしまった。

慌てて目をそらしたコリンだったが、一瞬だけ視界に入ったシャルロの肌色が網膜に焼き付く。

駄目だ。

男の子だと頭では理解していても、本能がその答えを拒絶している。

た。

「あ、そういうえばコリン様。一段ベッドはどちらを使うデスか？」

メイド服を畳みながらシャルロが振り向いた。

アンダーシャツにパンツだけという、あられもない格好だ。
お願いだから、早く上に何か着てほしい。

とりあえずコリンのスペースは、下の一段目に決まった。

出来るだけシャルロの方を見ないようにして、ベッドに潜り込む。シーツを頭から被ると、ほつとコリンは息を付いた。

シャルロとの共同生活は、精神力を鍛えないとい理性が崩壊してしまいそうだ。

「シャルロ！ 一緒に寝よう！」

勢い良く開いたドアから現れたのは、ショリーだった。

兎のぬいぐるみを脇に抱えて、目を爛々と輝かせて使用人部屋に躊躇なく足を踏み入れてきた。

寝間着に着替えていたシャルロが、目を丸くする。

「ショリーお嬢様、どうしたのテスか？」

「うむ！ なかなか寝付けなくてな！ シャルロと寝に来た」

「女の子がそんな無防備な」としちゃ駄目なのテスよ！ わたしだつて男の子なんテスから！」

「え？」

「え？」

「とにかく」自分の部屋に戻つて下さいなのテス！」

何とかショリーを追い返そうとするシャルロ。
もちろんショリーが聞く耳を持つ訳がなかった。
ずいづいと部屋に入つてくる。

「心配するな。前みたいにシャルロのシーツに入つたりはしない。
空いてる方のベッドで寝かせてもうただけだ。シャルロはどっちを使うのだ？ いや、夜這いなんてしないからな？」

「夜這いする気、満々テスよねッ？ つて、何でいきなり脱ぎだしてテスーーツ？」

「寝るときは全裸に決まっているだろう！ それともシャルロは自分で脱がせる方が好きか？ ふふ、仕方ないな。リクエストには応えてやる！」

「あ、ショリー嬢様、一段目のが「ま」

シャルロの忠告は間に合わなかつた。
いそいそとベッドに入ろうとするショリー。
しかしそこには既に、先客のコリンが潜り込んでいた。
三と四が合ひ。

「わわわ――――――ツ」

「わわわ――――――ツ」

ショリーとコリンの悲鳴が、見事にハモつた。

「機嫌モードだったショリーが一転、顔を真っ赤にさせた狼狽する。

半脱ぎだったパジャマの襟元を慌てて隠す様を見る限り、シャルロ相手以外では羞恥心も人並みにあるらしい。

「な、ななな、何でコリン殿が、この部屋に居るのだッ？ ここは私とシャルロの秘密の花園だぞ―」

「だつてこゝ、俺の部屋みたいだし？」

「有り得―――んッ、ミスターは何を考えているのだ！ そんなことが許されるなら、私だつてシャルロと同じ部屋がいいぞ―。コリン殿、私と代われ！」

地図駄を踏みながら羨ましがるシリ一。

残念ながら、これはヨーリンの役得だ。

「べらーシリーが歯ぎしつをして悔しがつたといふで、代わつて

モルヒネと麻薬

シャルロが何とかショリーを宥めようとしていたところへ、勢い良ぐドアが開き、さらに一人のパジャマ少女が現れた。

「やつほーー！ シャルロちゃん遊びに来たよー！」

「うめんね、迷惑だよね。でもリリちゃんがどうして強引に

サイドアップの元気な女の子と、気の弱そうなくせつ毛の少女。年の頃はシャルロやショリー達とほとんど変わらない。

みんなお目当てにはシャ川口のよこたたけ

一ノ瀬が口に三姫好きた変態でなくて良かうた

おかげで女の子に囲まれたシチニードーシミンにも取り乱すことなく、紳士的な対応が出来る。

「リンは片手を挙げると、爽やかに挨拶をした。

「やあ、いんばんは

元気一杯に入ってきた女の子が、コリンの存在は完全に予想外だたらしく悲鳴を上げる。

つたらしく悲鳴を上げる。

慌てたのは取り残された元気娘だ。

「リリちゃん、逃げるの早ッ！ シャルロちゃんまたね！ 撤退
ーーッ」

「ちよ、待つのだ、リリ！ 私を置いていくなー。」

釣られるよつこしてショリーも、パジャマ少女達を追い掛けて部屋から退散してしまった。

騒がしい女の子達だった。

男の子であるはずのシャルロの方が、よつぽじお淑やかなのはどうということだろう。

開いたままになつたドアが、ぎこぎこと揺れる。

片手を上げたポーズのまま固まつたコリンが、顔を引きつらせた。

「コリン様つ、おーこのトスよつー。」

胸の前で両手を合わせたシャルロが、尊敬の眼差しでコリンを見上げる。

「リリちゃん達を、目を合わせただけで撃退しけつたのデス！ いつもスージーお姉ちゃんが来るまで、絶対に帰らないのー。コリン様が居てくれれば、いたずらに干渉することなくべつすつ安眠なのデスよー。」

シャルロが喜んでくれるのは嬉しい。
嬉しいがしかし、純粋には喜べない。

「俺つてそんな、怖がらせるよつな顔してるとかなかあ？」

思わず泣いてしまつた。

こんな調子で明日からの使用人生活は、本当に大丈夫なんだろうか。

おやすみの挨拶を交わし、シャルロがランプを消す。
使用者の夜更かしは推奨されないし、明日の朝も早い。
不安を抱えたまま、コリンの夜は更けていく。

窓から聞こえる微かな森の音。

ヘイウッド邸は緑に囲まれた静かな環境だ。
シャルロはすぐに寝入ってしまう。
その寝息や衣擦れの音が気になつて、コリンが全く寝付けなかつたのは、ある意味で幸せだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0882t/>

メイドくんは男の娘！

2011年10月9日12時56分発行